七部集大鏡

冬の日

一

信濃何丸撰釋

冬牡日

牡日書れるを一名ゆゑ光りを添るゆゑ又を一名
雪之華とるこの又を物ゆゑ一名ハ成ゆとしるこのの
時をゆゑ一名書すくてゆゑ河豚をこ白ゆゑ例の
六指ゆゑ一名とかゆとしるとゆゑ鮭しゆゑ
窓うしてゆゑ一名ゆゑ三の指をこゆゑ俗人ゆ
二字をを字眼とす俗を亜名を切ヨスルゆゑ此
指おすとゆゑ一名を雪之華ゆゑ物故ゆゑの
白を腐ゆゑゆとして一名ゆゑ狂歌の才士ハ歌ハ
しゆゑ俗人の二字を字家にの歌をかゆ
ゆゑ字眼ゆゑ

牡日本うしれ方を行ゆゑ
消わひぬうゆゑ人の枝れいゆゑ方をいこう
しれ表のをゆゑ此歌ゆゑれゆゑ合すゆゑ
八中しゆゑ方わひをゆゑ又形ゆゑ歌
ゆゑしゆの歌を吟しの一名を牡日一部の大事ゆゑ八
毒正俗興立の一名を牡日一部の大事ゆゑ八
法説ゆゑしゆゑ第一狂白の二字をゆゑ
しなとしゆを惑説ゆゑと知ゆ後ゆゑ狂白
の二字をゆゑ法しゆとあるゆゑの形歌
毒をゆゑ名ゆゑの日一部の目尚れ二字ゆゑ五巻
めれ白ひゆ秀白れ重ハ狂白れ對を毒ゆゑ
ゆゑ一名ゆの世を悪ゆゑ角を山葉花ゆゑ
本ゆとゆゑ此方白と眼をうけ毒ゆゑ
ゆゑ知ゆ一甲子吟りの本書を當國

松平より出て赤穂浪士井上伊織の後江戸に交易
して常州水戸伊勢の侍師範の一社を以義を守
世人の犯罪を求めて赤穂浪士を作
歌の名を初芋歌と書てやみ医者としてみれ
通称を既に三度雖知芋歌と早下し
ものきを作歌をけうう京此なまハ次第に病
赤をうすくなりゆき業のをうしうをうるる
をえらまりて後西を使狂し終に狂歌の奴と
なり方を使さまを狂歌の奴と
まをなりなりなり小方の出をうして例の士なる
れくやみ医と国家なり既に初任庵の記に
任者を命の恐をうらやむと謝に入れ
主人に対れまれ方れ法をまえまりての
使犯法逃まして終に俳諧の奴となり名の日

のあるしまきに江戸に紙売れ中に
家なるなるまに入れ母えて昔狂歌の才士行方と
いるものの西を使犯をまさまを
行西し歌方と不肖なる方れ作なるなる
しまるなり一書に似るなるなるなる
とりに説を書きひるまとなり名を作に
歌のかまて方名なる様のかるなを持てきけ
そうなるのなる世なるのかし唱なをはら
うまるなる作に天狗自然の歌まして一大事
うなるなる一うに天狗自然の歌まして一大事
なり家なる作てあるとなるなるに服まなを
やとうなるなるなるなる紙れあるなるを
作るなる法なるなるなるまを俳諧に作る受
口決なるなるに族なを蕉門れ逗和なを蕉門し

世を紛はさひ給ふるを知矩とをそれ和を
まらぬ上仕る一
書を牡丹の書をそんる
世間白さひ給ふるとして大てし支考のあさむきる
人甚用捨れ入りおるる不すく形うれおるる
すを混して誕毒をるるるる
たそやとはす茶を煎れ山菜花
一書上詩やとを煎ますみてよむとを形り
とんりとよむはを水るのこうを多う
まを日りるうるを旧本上濁をとつけ
まをとはりとよるむよる細るを不るれ行
言上仕る人を詩とうけて笠上山菜花の
みをまちるを歩を煎をとるる花を
の略語る老人をとはるを仕をとはつく

とをとをしををいるる豆をやを黄未形くな
るくををとかしするとをふはまるはをつ通
韵をしををふはまるはをつ通
成美曰行る物語をわ三を刊行日数つる
て清洲の家金名古屋ふ茶ふるををひをを花
町上家をるて番板を出しをを形を
をるるるるまを彼紙をふ布るる仕事ハ
末線れ丸ふ行上拍をるをいるるすひる紫
油のをるををしのけをるをむまる茶形しる
今の行商業医善狂欲住尾張名古屋後生
江戸神田寛文年間人
霞條下ふ角ハ彩をとしふと古人の従と
又曰杭茶紙ふ角れ線をるをなるねと人れあゆむ
上仕るをるるけるいとをる

蒙曰古のことをしらずして山茱萸と人とかけて
作りたるなり二句共用の縁ふ白ゆゑんと云てさとる
事なし　愚考ことをしらずて花ハもとよりなりとあらしる
なり炭俵ふも角れとはしられずも散ぬに白けし萩
乃歌文曰かれく烟の手をあげ候くなりにまれなりしふ
あくまゆえあけしらぬ歌頌の者のいひ實朝公夕とよと
通音なれりしにいひらず山茱萸花を詩や歌せる
と然るを眼とする一書ふ茱萸ふ茱萸菜をさしてとし
ひとしのまで手えまとして眼をさとして眼なりとハ行
なるよう味そるのみならずそのやうなる人名のみ花をとりよ
言語なり一説一名とも過して眼なと〔illegible〕人参候の形
あるなる人は花あるて〔illegible〕山茱萸花かとも
あるなり云ましまた人れ花をきらんなる御座候すれ
みゆるなるも此歌のも利事とハ御歌なと注

すべて形し妄説なり
昔明ル主水ふ酒屋住たりけるが始て
一書ふ云ふ昔明ル石と云ものはじめて酒屋なりしと云
さらにきまり見明石まりあれて六条本願寺北役人として
酒屋する者あらば又一説ニ昔明石村といふ所より出る水
にて酒屋ありて天子へ上酒をしたまわりしゆへに此
説あり又叶まれ様よ酒を作ると見ゆるをひとつのこと
なるか又曰堀川卿小路御門屋にて酒屋まで昔
明といふ名酒ありて是なりといふ者相あり又
又一書ふ主水司をおのづから此事にて清酒
草ふあらむとして古酒なるまでに水を主る家名
まで酒などを作ることと云々　愚考ニ主水の造酒
を兼るといふも非なり職原ふ曰孝徳天皇
大化五年始て八省百官を置八省の中宮内

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典薬寮
掃部寮正親司内膳司造酒司宮女司主
水司皆是宮内省の所管なりて八省官
吋造酒司主水司は二度を経たる後に司
の造酒司を置き帯すべき状なり作酒のこと
まわとしいふ神代巻曰吾田鹿葦津姫ト定
田を号けて狭名田といふその田の稲をもて
天甜酒をかもして嘗ふ又太田命伝記に伊勢
諸伊特冊尊所生和久産巣日神の児豊宇
賀能売神月天より降坐善酒を醸ふと云
神代より造りそめる酒を主水司の為て作る一き
いうまでもなく全体酒を作ることは自ら人あり
酒を造ることあるいは一説に潮やはたらきもて之
やをうしうるかるとして論するはたらき説也

又一書に行成卿主水とあるを歩誠卿とあるは
よりしうとまきもむとよるべき作物なり仲
まて呼ぶこと水を眼前に見て非人倫なり此
数行のかなるは八時くるるに水をもて
皆曰主水を水をもれなるまは使はるまあれども
酒を造るべき謂なり

○うられ作法を物語る　赤　る
魚考赤馬と限るべきは意味あり主水
は酒を造らするを都うたとと見定めて百樂
は紙をもて拭はるるものすべきを神は
しまをもて赤弱のもうこと白る
のは墨をもうこと
赤なれば色を面白しと為
芝山曰五畿内より西の俚言は酒をれむを赤る

よ葉といひ他よりは酒店へとりて鮓を赤ましよ蹴て達へとりへ是醉の興よ葉にてそのすむなと云
なるべし

・湖鮮のかをりすきれ有ひるの元

是是日陽氣初てうすくなりこのまとときをよ
わひとりへ湖鮮すきよ限られ紫と呼れ同
しすみきりをるもれるり是藻の本姿こ
是考源氏よ美行の日ときと形くゆきよ出ほまてる
日のあわひを行れ葉の麦をまハほよひらうる
毒ようられまてよ日のきらめくとなるり細ま
すきをほよひ物をるまらやられまてやら
日れうをるをとるれるきとひねりうる
るり殺逆ゑれ伏をとをを味ひをる一一又万葉
の物よ仙芝を物とを白きををけていふこ

ゆかひとを毒きよ法をてけへ湖るりと云く
赤ゑるよ白れれうをるいと感あり
・日れらわしよ米を蒔
是是日米を荷をいまし一の鄙言るりいを西海
の色鄙ををいひをく行をて達縁るり日れちり
を日れまらふひらむとす形るり
・我ゑ屋を響よ宿をるをまて
・髮をやするを是の見出て悲ひて髮をを
一書よ葉平れ物をとを見出て悲ひて髮をを
やすとををるるる一一左大中將二条れ后いを
ををををとまて れりをる可荒海ようりて世をと
をを葉平敦盛の髮を切てをり葉平髮をを
やをむとをりを是をるをを好ようるをを引抗みむ
と吾妻れをを一ヤををるとをむ

愚考本を

荷よりの法くき業平紀氏の伊勢物語に
さまた髪をとんやすといふるまて三月れつ
まをなりはしまうし伊勢ものうりふむかし
心法きくてをさいの井なるを囲といふ所
よ家法りて居りそれと知りるを
宮くるふさとるきさ女とのいるるまを
く田ふむとて赤の男なるをえていみしの
すきるれく法也さやとてあはるとへまり
をまとをを一書還俗れんといを非るし
いはるものつうとと気ををりまて
きるをとはふすとしと法
新法の暁さるくふ八を焼て
一書曰ひるふこうとをまるる高るくの異なる
うさうひをうけて髪をきるまあるを推き

ものまて引もるさまるる女の伊よまるるる
次るを物ゆふ気をすてるとりふ一人の髪
るをうるるひる女廣るるまえていまく卒
新婆れ文まの消よを為るひをまるるをか
まるこのぬし図西れるるをの人まして巻の母ふ
をなるる法部うるるうるまい手載うく
れうまてをるるをとはをのるるなるれ感
するふあるを法を
巻笠曰まるるるるる
るの伊この眼ふすりていふを誠とれるまを母
の髪法をるるる法物まりてりを巻まて
をるるきや巻をるて眼巻卒部深とみしま
消うをむふ消あをを変るのと髪るれまを
まるるこの二るの洞ふ物まるるの髪まを
あるれ俗の字まてゆるまを一るふ一るの法けと

いとなれるゆゑ所ゆゑといふこと
とこそ　通考虚實は西湖ふまのきて世人ふ
ゆゑなる

・いるしを爻ふ　きえ　し　虚家
・田中ゆるふ万こ　柳　蒔る志ろ
・雪ふふねひく人ちむこの
通考ふまむ柳を津ふ田中ゆり蒔るれら
家を芦荷の俳と見て　小万　柳を蒔ること
芦を津函函江は芦を
淀川のすちゆり大和はれうふ文むり
夫婦して住ゆるふ　さいそむこと
和義のゆきを別して女房を京都へ出て
来ひしをとををゆるはふ芦ゆりて世の
きをゆきとすのゆるゆゆゆて略す

後のゆをその場の俳ふて淀川の戎函と
むりしわ　伊勢の浮洲と説来まるハ大形る
杜撰なりすして俳ゆを蒔ゆを吟味し形
後は俳ゆふ志ろを入て見さきを白を本
意ゆゆむくは子ゆる俳諧のふ
ゆれ不ゆるゆきるのみなるむすして
・とゆりさりき所ふ下を居る
・二の足ふを蒔の花はれさりわきく
・蒔をくむくりふしをゆわ鼻ゆむ
一書曰一鶏二鶏の女中尼ふゆるゆるを一の尼二
の尼といふその尼の所の物家ふ下居るさゆて
蒔をくむくと汁はいをきて　ををふきハ
その尼ふ蒔盛の所の物　消ふむをゆる
ゆけゆり　蒔笠曰とゆりさりさうをいやしき

ものをうすむ所の中髮ひとすじ又一の尼とく
より下を居して まもるむる〜二の尼をおれて
法師をあわるるむ是ぜ道なりさて一所より
高仕をし一の尼れるをうくて位ふくをねる
とめて讃るる形をむ一の尼宮中れい形ひる昔
るをうくく讃をわし二の尼より近来の花をむ
くふこををやの毒のなるいるとおのの
りてより後のるをくをねの者むよわらく
きみのりまして位をくや位し位をまいの
る数月雪のをまりを高きをく輝より
時をとををを若くを仕のをうくを
花のふをみまをいとを滅してものいをうる
女の情をるるをくくるくや此西人とより拾て
高女形数古堂いるを及をく鼻をむハ俗より

を鼻をうして泣るをり　題考生鼻曰涙
生眼曰涙いの連をるをみをりまを殺して
歎く時を涙目より生声を呑て悲泣するはハ
涕鼻より出るをり則をるをむををみをを泣
むるをり
・をふをれより名をすく新れおろ形数
・いめろ恨の矢をは形つ考
一書ふ晋れ豫讓の主君の仇をむくをむる
ふををしふをすをを仇ねををし使をり
又を韓信ふたのまをする使去の木をまふ
をのい居て鉄槌をおけをする使をりと云
無考豫讓をりを戦国策史記ふふ趙襄子
の衣をを云して抜剣三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏剣自殺又韓信ふをのやまして

始皇をうつとて人遣ひなる一し秦韓をか
ろかしして天下を一統す張良倉海君と謀り
て重さ百二十斤の鉄椎をもて始皇を博浪
沙にうちあやまりて副車にあたると史記説苑
等に出たり是てきのうちむかひ此あるを刺客
鉄椎さしふり第九沙決るを是をひとつの所
をいそ故事諺に口清和の水美濃も源頼
信流るに任し三瀬半底を伝濃様に任すはに
美濃と伝濃の境三坂といふ所にて難に成なり
その比本当に山中に妖怪あり九棚孫の様にて
神代より住なるまして神通変化きたり狐守
底の妻白菊を客貌玉九めし妖怪山神に成
り合きて白日を変して黄昏となり路に
旅鈴を敷守守護の一族家に一宿すときに

夜中白菊をうそうて目さめて見まはすに花しくる
世界に出中なり守底郎等を引後し山中に
分入てもとむまとも絶に探りはけに浦島う
孫兵の童に三依道人といふ人あり是に対して
吉凶を占ふに吉なりと云ふ処に前供人をく
らひ近習家物をこのこみ玄関にこうきすく烏帽子
垂衣にて立出る次の家あり美麗の婦人多
くうしなきて客殿に通るよくしに見すをを女房
の白菊なりと守底思ふ人のいのり妖怪の
所なるをくさの士さう女房の敵とおもむる
と日ふ手練の一東三箭きりしと引絞りつて
けさ矢に切てそれう彼士三郎の矢をたちの
と口ふ矢とめて妖怪命数
やをそこうを射を投三日雷に射落ふ事なりて死てより

それを此幸ふ支蟬全うして活ふるなるべし
物といひ矣をなるものあるといの又次対白まよ
範う松を伐うれをその場をもしかるり此ふを
書篇としいふを白蜀礼故るゆ曳りと云く陸佃
埋雞曰猿性靜猴性躁至所林木振雪云く
抱朴子曰猴一名胡孫云く
・盜人の祀念の松の吹をれ云
一書ふ美濃国然坂の物見の松なりと云く
愚考中仙道赤阪の西なり古松を植て今
のこる享保年中ふ植るなり元西のこるか
なく赤勝ふ蟹義す兵隠の松ふまいりへ
をそなふを一寄なり
・志ほ〻 宗祇の名をつけし水
一書ふみのく西郡上郡山田庄宮瀬川の亀之

此泉を東世列宗祇法師ふ古今伝授
をうけしの不まて松なるまひ和歌を詠をら
まつとなり又此泉を白雪水とまいふより
宗祇を白雪翁といふ也
・世ふ 脱て云紀ふまぬ水ふ
一書ふ宗祇の白ふ世ふ
ゆるりのれ
・なりしとなるをまをまをまを人れ貴ふ
・鳥絨ををひすの西れらを
・あをまをの謎ふとけし時を
一書ふ貴ふなのといふをうをまていやし人の
貴りをなるを鳥絨の甲なり亀の甲ハト亟
ふ鼎ひて吉凶ををるを心鳥絨の甲を胡西の
うらををよををるをしを取上て占ふと云く

一書に曰く白丸人の骨の行のといふるをいく度も
吟ずして見晒骨男しとして古戦場なり
とまたその仮なりそその烏絨の甲ゆくゑ胡函の
古とるさそやと云く　一書に謎を占の對
時なる一に曰く白丸人を謎るとまとう
なりて日行の庚申行るものたつまに拾ひと時さ
まとく云く　遠考此三名れそそひそ流罪の人の
貸なり祚龜卜れ来由といふを史記の龜策伝に
曰自古聖王將建國受命興動事業何嘗不
宝卜筮以明善唐虞以上不可記已自三代之
興各拠禎祥塗山之兆從而夏啓世為惡之卜
順故殷興百穀之筮吉故周王王者決定法疑
參以卜筮斷以蓍龜不易之道也蠻夷氏羌
雖無君臣之序亦有決疑之卜或以金石或以

草木國不同俗云く又酉陽雜俎曰昔秦王東
方求鮫人織紗為帳以水代之成
故求其鮫人織紗為帳以水代之成
絨と号ふの云く其州烏を鳥絨と云ふ此魚を烏
ふ烏ふまきを見て水中に沈むて見を嗜む故ようそくと書と云
て水中に沈むて見を嗜む故ようそくと書と云
彼流罪の人をふ流辺ふ生て道遥すまいハ行
やらまきを白きものありいハ人の骨ゆ行と心
かそくまとうなりて骨まとなりていの
甲ゆの幸我身れ義を占を流辺れと
なまきを見を多論合石とまを見を人鳴呼
昔秦王の筭然北てるるを魚なまハ胡國
のうらくうまを亮亮のるるりとを占を行
ふまあまきをかとくきまの一筭告を謎まを

我も此地にて昔よりあるむかしの眼鏡にて
見るかぬめりとまゝに烏紙の甲まを作りて杜撰
なるべしとて海きさらのなかの久間物離想の白
杜鵑初鳴の時先国者遇別離悲又華陽風信
記曰杜鵑春至則鳴先国者者別離苦苦
海きさらのとゝろのなかるを為まるの一升酒
・林水一升 ゆり 作りて 夜う
一云ふ先曲えのなかるを謎と問ふを答て
林の夜の雨きさらを問ふ山一升ふ漏刻を
ゆるさるものなり 一書に林水を酒なるべしと
とをいふ云ふスイとむ一升林を酒のなる
まて金気なり西を陶なるまて数水をひとみの酒
を書て酒の字れ我を見るとなる一升なり
海きさらを酒 高なりと云く 是考林水を酒

こゝろを非なり一巻れうの酒の沙汰二ヶ所ある
及まるむや先任のめ〳〵漏刻刻漏刻まるを事林秉記
まるを刻漏刻変黄帝創漏水制器以分益夜本
紀なるて天智帝いまを太子れ時なるめて漏刻を
定まるて何刻の転敲を云む

・日東れ李白ら対ふ月を見て
一書ふ酒好なる沙汰なる人を李白〳〵なる
なるまるふ盧仝と和〳〵なる 一書ふ
李白を丈山なり石川丈山を本朝の名人ふ
て和国なるを日東れ李白と褒称まるとく
成美日素堂家集ふ石川丈山の詩仙堂を尋
といふ詩六言六句 先尋日東李翁對
中華仙観山鳥啼 そ松樹野客入来掩関
坊無紙何要好泉石前翠微間

愚考日東をシツトウしよの地下一唐書曰日本を古
の倭一と去京師一万四千里新羅の東南に萬
海中に在て東西五ヶ月に行南北を三ヶ月に行
國に城郭なく木を聯て柵為とす茅を葺て屋
茨甚俗女多く男多おのゝ浮図法を
ふるの俗推髻なして冠帯なく髮を後に
結ん倭の名を惡て号を日本と更む國日の
邪る所に近しを以て名とす　寒松日先輩
義潭に丈山初年喜翟曇氏に後介羅山
学程窩門に一従事斯文才尤長に於詩朝
鮮接式称為に日東李杜と云く物徂徠亦曰
東方之詩杰也　愚考奚城又有に乗寺号に
凸花石公偉偶を凸感其地名同而偉字相偶
自号凹凸窠　故日東の李白と称ぶ也

巾に木　槿をくさむ　毘邑　打
一書に服れ笠に山茶花とあるは又巾に木
槿をいうとしるに疑ひましまを服の山茶花を
を始みて枝ゆるに花を
我のくるまとあるとを　一書に閑元遺事曰沙陽王
進嘗載硝帽手曲上自摘取槿簪置帽上遊滑久
而方安曲終花不墮嘆曰花奴　一書に玄怪記に
織人あるとを　東坡の詩に沙陽真天人絡帽著
紅槿　愚考手を擊るを歐陽公帰田録云打字
當音滿以手丁丁亦擊物声擊手音戟扣也打也
られ字義をもきまるに一きるに妙
考使文故大使師を西国一流罪の義柴蔵れ
物発配一面をのきて接を友弦を打をもし
をつとを云く　弦を月を月の摩一織人の中を

かつの木槿をうゑしていふ[illegible]程
の心得まて伽藍を[illegible]
給ひけり
かくれ給ふて出家に[illegible]
一 善光大和の国の[illegible]南院の[illegible]
[illegible]
[illegible]今善一[illegible]
哉[illegible]
[illegible]
大き[illegible]菩薩[illegible]
等[illegible]伴傳の[illegible]
関ると[illegible]仏[illegible]
見[illegible]堂を建て[illegible]
居[illegible]大木[illegible]此[illegible]

てら[illegible]
[illegible]仏像を[illegible]
[illegible]西の京に[illegible]
紫[illegible]当入涅槃法仏菩薩[illegible]
[illegible]六月の二日[illegible]眼入[illegible]
日[illegible]此堂[illegible]
[illegible]
勤供[illegible]
[illegible]
二日まて[illegible]入滅の日[illegible]
[illegible]仏[illegible]群集[illegible]
中を[illegible]木槿[illegible]琵琶[illegible]
[illegible]一人目立て[illegible]
人[illegible]一[illegible]附[illegible]

この札をとりて生まれたる子の首に掛くれば
ひとりをもなくてたやすく生まれ出づ
若し産の時に臨みて難産なるの
の子の一疋を奪ひ去りて滅ぼされ
則ち産まれたる子の一
一書に云ふ産の中の一疋を生れ出づ
産の時に魚を乞ひて来たりて夕つかた
賣りに出でて市人に与へ世中に出でありさまを
して得たりと云ふ　一書に室の八島に住
取りたりとなりて上古その産の鬼魅てんのまを
魚を薬の火に焼て門に置くその門に
くらうとうとうとうとうとう鬼失て
後にその場に鉄を結ぶ又寺院堂舎の
の八角にうつる煙わうとのうれ代の法師
をうれ代といふこと
一書に上総房列の漁師
ある時魚を施して布施と
供養のまさるるまで魚に戒名を記して布
施とすと云ふ　八生の腹腫病のやまひ
おのく失ふる年表のの第九の一しと云ふ
因書に氏鉢をコノシロといふ訳を室八島の孫
記に云むう一人の箱みめよき娘を持る事
の身のうひさすうにれとる娘をのくに辞しる
ゆへ玉手のとうあを為まして死ぬるといふ
指の中に鉢を入てうとハすしうるとこ云

愚考するに商人なれども牛の事ひかれてなきは何の
さる故いかにといふに錦なるはなきなる画
ところ次第ひろまれるに牛を玉の帰にいひて二へ
こ詞すなはち代をいひて二へ編みてさ見えたりさ
すまじいはんの謂なりけり一それより市人の解
なりしは鬼神なる人贄の事なるべし
我しいのる所は此星を拝むべく
衆注曰子の日しろとといふをうけて子の日なるき
人の祈りなるべしと見えて神前に終夜
さゝけりと見えたり　一書に海道記に満上玉の
さて云ふ或はちもをひて祈りしの　日生東方
ふ建処の木曜星夷を司るの百福をいのる
紀のありしありて寿命位あるをきて後栄を祈
よしありと云へ　箋注曰神前に終夜などさしけて

いのるになりしは古よりさきて潔斎断食して壹上
ふるさと伝へて天よりいのちのさかりなりき星
を肚とせしまゝに星を拝して平人まなかしく
次の日蜂の世たるまさに此みなよりしめを
そうりなるゝほとをそうりひいのちのさかり
まさに二日此を云かれ情を味あわてまた微
蜘の境きて感しらまりのまゝ　馬琴かしこ
胎生しる例和漢ともにおきき中に神仙傳
に曰傳説孔宥歳星東方朔生而此星されをも
方の星き満ちの紋めありて完きるし
さてまた蜘蛛の眉うきよりいれ
一書に漢の張敞か眉を画てやりし故事
ありとまた
一書に蜘蛛同しく家伝して承る條

姉八あるべき君の法御流をくむべきものなれば
姉妹いまだ出家せざるうちに眉
をかきて出家す仏前に供する義なるべし
みて涙をながし　愚考後一条院寛仁元
中姉妹三人同時列位と本朝年譜に見えたり
一書に花厳の山水を画き出家の後入て
又一書に上東門院すでに産婦病人産れ櫛湯
愚考
湯を非なり櫛湯を形
眉こうを平人のすべきなるべ
都の体と見て後ひらく

とをいう茶湯を釜の湯を渡してちりはらふと
の上に涼傘をいふ
花を挿二瓶をもてまつる
花厳の侍所を大塔の宮と号し
一書に居湯の侍所を大塔の宮と号し
てと読て
廊下　茵のうけつぐ
一書に湯屋にまきれ廊下茵の新敷
つくるを目出度揚るなり　白氏文集
に鏡奩紫茵架　さまとし懸つるのこと
一に愚菓盤侍にて不動の重なる新敷
花厳をこのつくる御なるべし　初一

・れりとて此年いまだ衣を振るはず
一書に杜子美の老大非傷未拂衣といふ句を
を含むの前書なりといふまた非なり　一書に前
書れぬく振衣千仞岡濯足万里流と思ひ付
ふ然津例の國しを強ひ奇跡を遍歴
して泉石をたづねてとゝく　曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壯
・えり雪れたゝしたる袴を作る
一書に蒙れ續き泉石を尋ね煙霧に分入
月に雪に雅懐を述て生涯を楽むこと等
しき歟と也　とゝも五升米のたゝ是を終ら
まて分ゝその意を果さん寒袴を殿事を
好ましてたゝしの雪に袴を作るより寒
意しる余意限りなしとかるに切字の事

切字は代に出ある
ぬし

法家ものらしに諸して初心の惑ひ少うして
も切字なるまこと成る事なるに仮に
なりて切字れ入れるまきを押て切字なり　ゝ
知てるれ意を抜に成るものあるとなりとう当時を
大低その心を得ゝ成る先手の字作ゝる切字の
口伝をあるまし古ふ新しく式ゝ切字れ
初心を助るるまて字匠勝みてゝ作授す
一しくき　先義ハ混沌の間より太極れ一気のう
こきを生ずまと法陽れ姿の分きされて義ハ
字を用ふ附物二ツ以上あるまてはりて定法陽と
なる事なるの切字を用ふ物に對して別に義
なるの切字をいふ事なるれ付るうむ　第一切
字を用ゆ平ると為を分むるを生ずる　一四
惟然　曰切字節こ行を芭蕉ゆ仁ゆ

なるまハ切字を義のゆしとする切字を入るまきこなるゆ
然し切字を入さる者義の枝風よりをまて悲し
き素材枝さの名を松倉嵐蘭の追悼れる句
亦當帰より名をまさハ塚のすみまを見るこ出羽
の名丸の旅中ゆ死する句を悼める句ことれ解ゆ芭蕉
帰を當ゆ詠る一しの意ゆて古園句を詠む句
を待その身を詠む句とれ句ひ詠む句なるまを
塚ゆすむとして句を詠る句をすむとの注者
句きまゆ切字を用ひさる句を呼第を三世の者
孤句まとさる切らさる句を義の微意句 下略
蕉村曰我ゆ句を切字とをいとく断ゆ
し彩り　愚考嵐蘭呂丸の悼の句れ句を金花
傳ゆ此句をひき又句をまを口ま仏しる句を浅る
しき注者句り句出上の俳句をとを及ゆ

きまをよきまるまとゆりゆ族を百人ゆ九十九人句
彩て法とゆ句を知らぬ出ゆ言勝の句ゆ
句ゆくきそ句を彩れ大切の秘傳句まとを
ちとを句行句しをゆ一一作切字とゆ句を切る
句ゆそ句句キレ字句句切字句句句字句句の
蕉村の彩字とゆ句ゆ切字とゆ句ゆ
句て句きき大句句ハ句句句ゆ出句句句ゆ
し法切大切句とゆ句句句句句一し暦句祝義
の句ゆ必切字を入一しセツ字句句れを陰陽句
彩句彼とを合句て夫婦合傳の句句
ハ二本立句て微ゆ句ゆ夫婦暦句ゆと者
きる句の句きゆ切字句ゆ入句ねを彩句ゆとゆ
を師第を三世の孤句ハ切字を入句句義
れ微意句とを句ゆ法句句句句句句句

なり支那ハ切字を入るまじハ切まるといひて一字三
のみをすやいなハ初心の業このやうなる妄言を
弊し誠とおもひ一うしに同書ハ又曰連歌本式
俗ハ切字を格字なりとなのまて切字ハ格字
なるなるとなり一うしに切字を義なれ格字なるハ
一句の常言ハ格なるて一句格中ハ格なるハ
殺し格ハ法外なり格を拔て格
ハ格字なり一句
愚考ハ此論をいひ出ねて所ハ
ひて格とひて切字格字ハ格と大違ひし
格字とひハ仮令ハ格日格番格なるの数まて
なるなるを寄やうけて物まを格字とハ違云
なる格中格ハの義を敷を隔なるハ
一発しのなるきのうしハ
すなるうし

霜ハ
一書ハ今日を勤のとひ
注なる人皆まるまてなる
この俳林良材ハ又なるとて文字まて書てるとて
一書ハ華のおめしと義ハのこまるをなのまき
ハ光ゆのるく心新の食とるく仕度ハいとなる
き文なる新ハ森もなるして舞の咲をえるなる
食喰ハと新なる一句
愚考新森なるしく
て新新をえなるなる食なるなる意をれき
しハ成て森なると脱とまるなる泊り番
の士なるれ陶なるなる神書のなるしなるをみて
さて宿へ這入て新食の脇ハ向ハ小座の新
座の素を常て為のまこの咲ハさけるをみ
て世れあるさなを為ハ引なる為て前書なる

かなれば此余情をもいふべしとなるべし

・世菊をまて霜の葉れ物をまて

一書に曰まことにいへ初をおもてなさこの蕾林をもて

第三とすと云々又一書に霜に紅葉の如しといふに

より蕾林の作を附るべし　愚考まことにいふに

よて林季を附るこの事の紅葉の如しより蕾林を附

るのことにて也祖翁此一流を始られ新古語曰槿花發飯臺秋興

ゆゑ深きより不あり古語曰槿花發飯臺秋興

入文門こうるより不あるを愚昧此にさきよりけて

を作るのやうに云崩すゆゑ頗に念れるゆゑ歟の

附別事形

・麻呂の月袖に羯鼓を好まるむ

一書に仲麿ゆゑ吳竜二年入唐年二十六天宝

十二年皇朝一帰らむとして明州の津に出て天

の原ふりさけのぞみて詠し又王維の送別の詩

なりその比此詩人餞して羯鼓をうつすむ

と成一

・梶花をあるる貞徳此　家

一書に月ゆゑ常住不変のゆゑ此又季のうつるを

を附るべし　一書に麿といふより貞徳を附るべ

彼長既九と号して隠者形なりて落

和に五園の別荘なり梅園　梶園　芍薬園　柳園

芦の丸屋此ゆゑ梶園のあるべし

一書に梶花をあるべし

さうゆゑ梶ゆゑ神此紫蘇きるものゆゑ

三子代第ゆゑ此ゆゑ

ゆゑ壽ゆゑ此ゆゑ貞徳の

八十余歳を持りとうさまに八条とこの歌

といひ爲れ刻うしし故なるもよさう
爲考流注のくくのぬくくを爲てるるを
見ゆまとよさうふしるるもてをさうしるる一
月ゐ不変るるまとをとるゐ
てゐ槐花といひ貞徳しらひるつてれを彩るへ
しと槐園として五園を定めるとるをるる
はけの注るゐ磨ふ貞徳の見迎を海いをれと
るゐるるけやをき羯鼓乃やわふなるゃりい全体
物れ注ををむりふ先を見れ日の俳諧を解ぎを
を見の日ゐうるるきふ不語て解ぎ(まをと遥
ひるきふようるを出りてうきをるるゆふさ
らふうを弁云爲八彩やうよ減りくを見れをを
を見の日の流り墨の日様義時代をうくを迎て
解ぎ一と又をの後春の番量ひしるるるうと

さて此槐花を羯鼓ふ俗るるものるう円機
活法曰明皇弄羯鼓槐杏皆發又酉陽雑俎
曰羯鼓を音獨大簇を一韻也さまとを義時の
一韻と云槐杏皆發と云迎を迎ぬふるを
と槐花をとりて事うを俗るるるるるるもの
羯鼓録曰擊以兩杖又通典曰正如漆桶兩頭
俱擊以出羯中号羯鼓全体兩杖鼓と云

・雨ふゆう濃香れ田螺ふひとうを
一書ふ爲といふうう海を北沼の田ふを取を也
て意義の泉水ふるるとふゐ沼て雪むとるう
河系院の子賀れ法竈をうを〳〵まひ又井出の
蛙を放ら又を字治の蛍をとうをるれ数乃
書を引を て田りを俳諧のをうをみるう

・奥のきさらをを只注ふ形く

一書に曰く一の女月は空を崇てひとり世を行く人情ふかしみちのくの事れひ歩て思ふなかくとなり　一書に曰く月を面て世をわたる人を得ずはきさらぎ紀のさきもの嘆くなり方なるむ[illegible]今は縁入のやうに服をなくて寒き夜を志のく辭りなる嵯一音の布の衣なりとう縁は

考注公の世代より伝り賜て二百年ばかりを過らざるものなり奥儀抄に曰正月元旦とあるはこの月さえうつて衣を更ふるなるべきなりいふとなり　愚考曰ふるを面て世をわたる人か余きに思ふなて法とあるを法人を実方朝臣の小雪て奥のきさらきを法人の実方朝臣の小の方なるの伝と実方朝臣は辛奥列は任よりやまひをかうむりて

とあり新撰の伝に淺の花の法みと
いふものを苟面て菅一とあり　後京兼圖に
曰長保元年正月廿六日辛す又世法りれ
ふるむと伝一学伝りし誠や義人既ふ
成ものなて陸奥ものしるに成てこのくまのひし
ろも此世ものなる面上の臺盤すいるを八雀
上りてそふ形なとそ実方中将れ北のひの
ろりやとやふ誠に伝ハ物きるに
むとなく実方れ車跡技来捜神記故事談に
ふあきとる略す彼淺の花の法みを心底
にりて淺香の曰りとなて法ふ人を
伝るるきを面ていふ正月れ辛去をぬ月と伝り

うを雑すり人をあらむ梅花をこそ三月の季なれ
四月をこそ二月三月ゆ通ふむつきといふけこそ季
なるきさらぎ弥生を春季なりとするは故ゆ四月と
ばかりを附るは法なり近年春季庚季跨
ゆ崩れしうり附をこそのしるあるるなり心
得すむそのの一つ云ふ大事なり

一書ゆ奥は如月を位とするより陸奥産の伊城
をえ出して田舎客の初なるうく来ふけ歌
まて語り合るゆ同郷まて雖ゆ後者同士といふ
歩ばくこと云く次の名を後者同士といふ
より初き附を号は中なりしを女れることを人な
のとはさまし云ふ或を新奥ゆきなりて賣られ
しゆ孫のさかをけりとを恨は

のうしなり　一書ゆ云ふ田舎は常
なりて伊城賣女と成ばるを甚ふるるなり
て今後者の未と定てよりを忍面を赤らめい
をこそ鹿て雪のをなて遠ゆ松山は波うけて
来は弱来をゆ弱ばば昊を常の書とをな
をこそく誓云してちまりばるゆいかを無を
さめをてそのを死を打をうけて孫のをかけと
をるるをよと恨のうしとの伊るる一　異考
そのの言号をるを牧女ゆ夫婦をるるる一
又次の注ゆ雪ゆ弱来ををつまとを後者れは
田舎をは雲気をて無をさめくうとを勝を
の注歌をるをいゆ雪よりをるを弱来して女房
をるるをむしとらきうしゆ来ゆけ双方をとけ
てそのをとをうりてゆ後者はをるりさてを

今まて心をそしらるを二人とも不服合しかたなく
なり是必同姓の親数なれて成へし　礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜　云て賣女の
なるなるをハうらなしとて沼来まて志ゆきまとよく
し乳してはまとして同姓の後まなるとまて海
みくらの陰嘉なるなり白虎通曰不娶同姓者重
人倫防淫泆恥与禽獸同也又論語曰君娶
於吳為同姓謂之吳孟子君而知礼孰不知
礼云て是法不妨らるる恨すて堅気なるなら民
口をしとて癖をたちきるちちうるなき
明日を敵　不　首れとわをむ
小三太　不孟とをひとろうをし
庇廷時日結納を海て吉日まて格りうる敬
んと出の癖をを出きまて深伝の妨とハまるる

よやうをたちきりてまる而一きろそのちりうをなる
しるる次をを竜城防我の術まはきまて明日
を敵の方へ首をれるれとをむと是時を格めるる
出の癖をを祇れと名を惜む勇将社侍之
次を名残の酒嘉のあるて小性の小三太と孟
をとらをて大将の自ら一さし舞うて家一
月を祇うこの事　牡丹ぬす人
衆廷この酒嘉のまきまと名花の牡丹を
ぬすまるむと云のひ込て雅の盗人月れう
くまと心をとうれて庭前をぬきなのしをる
をうきを形りて云て　芳宣曰花盗人をとうめぬ
牡丹のぬしれ心の根流を双紙の地ようしなの
らをしる陰るる
出つしとれ花　切町

初花の世とや嫁のいこのめしく
きつしそを元こそ樂天の詩より不謂劉
院葉終朝醉元こそ俗語を用ふ迫
以を意れちくれを粗まえ侍の祖義曰俗
諺平話とれみ是しるハ謂者きこ俗談
平話をそめさむこのさめるとをこれり
しそうこのさる形るる山ゆ后地義より結
ひ迫ちさて初花の白より亜て世としてや
嫁のと書る李皆てそ注より曰初花の世と
を迫き以ふ法きさる女まして上日ゆり
の衣裳れ花やう形をへうゆ　　ふる
ふてと云て　題考嫁のいう者きと云るハ
そうるめ云くさ形るヨメリれいうめしくるう
地義切所といふ所ふけるき婚礼

を附出らを考しを考しを考れ嫁まてその嫁入
れ行粧をいうめしくとをかるものるう此
注者をめて考義用てる是こそこをなやる
ふすきをいうめしくとる籠く又不畏くを
書るりをより不れ附子細る　　蒙公五百此
附蕉家一大るれ附して初号のゆやすこのう
ぬ不るり是を就想の附といふ地義切といふ
を沈然として就すさるしなる中ふをいを児
の墓をるまは建るのこと世れう一第一れ
くう形みふ就しゆ形るるを号ふ就
ありいうめしく花をこのさう嫁入さるれや
ありさのるるの中しるを左をとうみく
らくて左岩迅速を就恵しるるり
葉さめしのさて　七十

一書曰前白に基を志すことなり老人と附きたる者き附きて立憶を志すこの者のしに
ふいるをそりれる時立高きこのちるものと云て
為考七十と切るを礼記曰大夫七十而致
事若不得謝則必賜几杖又杜詩云人生七
十古来稀と云へ狭衣に致仕の大納言なり
それを衆注に老とて老人を附きたる
そまいの又盲の見といひたる亟し是より以下
別に詠る
意をめきめるく除海をまの
秋蟬のこるに聲きく静さハ
一書曰面白き附るれとこのうに声きく而除海
に系得ちねを宮を為声しや　一書に髮れ赤
かれるといふより除海の母しを孫師

附るる一一漢土の好ひて書を玉まひし
夫やるを待るて桟を織搗夜を清らた
して待事るる除海の母を至て思恋除く
述て眼を泣はるるとて云へ次れ白ハ孫師
のうにまて大悟の意を云流しるて生
なる蟬の声に虚にあり聲をきく一きてく
一書曰唐梅といふより中華れ人物を附老女
といふて意を砧と甚面白し婆を焼
庵之話則老女孫邪に帰して除海の侍を養
ひ置てその侍の悟道をもるみ心るを
小女をして侍に意墓の体を教ゆ即今一同
曰正當慈齋河如何僧答曰枯木倚寒岩三
冬無暖気　甚河婆子曰徒二十年来俗漢を養
ふるを侍を追拂ひ庵を焼うるれ老婆をや

附くらむ　　風谷とまふ日黄檗禪師得道
後忽思省侍父母師往到圃中一婆子出問何處
来師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不帰師恩借宿婆親爲洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運辭去於三里外説与郷
人云吾母不識山僧但母子一見足矣郷人報
知其母趨至福清渡運已發船一跌而終
愚老如らく燒庵の詰なるに養ひ置くる偽
形らん待ふ及ふ〻〻戀ともあまた我子小
美をむとのきめるなり次ふ禪れるふ形の
聲をきくとしり〻意味の深き況を考られ光明
藏小曰除病を達磨の骨髓なり又曰除滅れ一
喝を烏啄堂毒の如し人を殺して又活す亟
しなし筆をもて書へるに口をもてる亟を淡

除病を地ふ因て名を得るり唐咸通八年四月十
一日逝す次の句を一書ふ曰秋蟬殺の実二句一意と
前句静さいといひれこ〻〻れ夫ふを句を
ちらく仏の一き形り故ふ次れ句ふその雫を蔭視
ふ文ふを雲水の雅客なりと云く
ひとり〻を典侍れ居の内侍の
一書ふ山花ふ現をひらく〻とりふ小原御幸れ
休ふ見ふ一〻〻一平家物語ふ文治元年五月朔日
長岡寺阿證上人御戒の師ふて女院并典侍局
阿波内侍法持ふして同年九月れ未小原ふ山
居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原御幸万
里小路中納言殿ふ執筆ふて御製池水ふ行の
燭らんしきて浪の花ふを盛形ふ〻〻ふ余情ハ
女院典侍の局山路小出て稼法み草れ形ふと

て入て山を下るを見て侍従して一人を女院より召すひとりを居り内侍のと見給ふ侍るり居を典侍居内侍居命婦居出居殿居此居れ内二人れ居を女院より召しこれ尼より召しその使るり是を一書に内裏上臈の旅形るむとい人を先注をとりて出侍ふ出むれ偏執るり

三ヶ北花鬘時尾出れ多いくさ

一書ふ人数多れ女房並居る侍るまハ家ふ内裡の給人をれりひよりもるり紀事曰禁裏清涼殿南階前有国給其雜袴家中雲客被出之仙納弥市就此事決勝負一書ふ三日ありて八るく三ヶの津北義ちる一しと云くれり人漢土ふを国雜のるりり玉燭宝典ふ曰寒食の節城市多為国雜戯又云宗白王帝民間清明国雜戯を楽むとなきくやはり三日のるるる一しちらこのみいさむ越れ獨活苅

一書ふ宮ふまを禁東裏一国しの産物を貢する仲之越を貢ふすの熟俗るる一し揚白ハ祝云ふて重代のさちらこのみいさむとを白

一支の翁を恨ひて貢を貢ふ書るるる一しと云

一説ふ越の獨活苅を越後の弥彦の神事ふて伊夜日古の神を独活をきこらひまふりて弥彦山ふをうとを生きをとい人戸伊夜彦山の神去ふ應對して此るを尋ふさらふそのを伝一を伝ひとき思評越を貢ふすの熟俗

ふりとを達をうけひうとそ出相ふり越後一ふ伊ゆる道のかと吹浦渡江海辺

嘗笠曰

山林の中に二つの小社なりと往古を大社に
して一を白髮明神と一を独活荊明神と
称す根元白髮明神地主の神にして独活荊
をそなへの境地をこのうて強意すとなり俚言に
いふ上古此二神甚仲なりく白髮怒ほとく
やくすまとて神軍ありて海陸穏なりく仇
毛悉失すなるに白髮の社にて独活を好
まとて独活荊の神うとを荊て白髮に献し
謝しまとて白髮よりこひいさみ急なつまり
まひて軍和平にまるに是ほ荊なりきとそ
此例を傳へて三月三日を桑日とし中古にて
大礼行なまと唐子のたるに横ひの掛衣未を表
し数百人各酒を携へ独活を提列
をなりにく廣前に進み洛にそのうを供を

白髮の社檀に傳へうと荊の神にうの献物
と称すりし一とを忘れを忘怒烈風
風雷して俄毛を失ひそうとうをうるに
星霜を重ねうたうのうて神位義今をそなうに
為をうれ小社となるりいさうを日に俚俗
独活を傳る小武の神はうをを忘怒烈風
とうや此前自髮軍れにくやの形なる味の
まとてその名林の活をうめるとまりに心れ
ひくまとうり神軍とうをうるを忘て志のうを傳
出をしまものと神るを義れいさみをうさ
まるを姿にうをうるにまあるにや

杖をひくるを僅に十歩

愚考漢書食貨志曰以六尺為步

十月にはなりてなほ十間ばかりゆくやゆうすれば
なりといふ意なり先年はかりなれば
一名ホ光りを添する説書なり
ほしみのうてはかりとうあすあす
一書に俄に空うきくもりあり少しかと十歩を
過ぬ上にはかりきくけしきしく降今まてええ月
のこのうれくるを光のうくれきうに無して月と
き為すと伝まるなむ　一書に僅十歩のうち
るまるかうとえまて忽月変とうるなる物
変の歌恵なりとうく　愚考世上の説を七通り
なりたるまるとあるまるとあるいの異し次第まるし双
方一字出るなこと支白を解するを必ものえをく
し吟味して白時の動くうこうるをうるる
所聞なりえ素此白仕を字をれうまる

孫ま迷ひきを月とひとの字をへてをうれの姿と
ものもうはるまれ空をこのやうよりをやくれ
りひらけるきものホ所ホ仮令ありてを十度ホ
一度なりを支霰れ李時といふを劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而陽気落不相入則散而為霰ホき
なりて凝ひををうを一つ次ホひとつの徒授をみよ
五孔仙のかるを風　雲　霧　炭賣　霜月なり
遠加の巻孔霰の白るなり古書ホ住釈ををむを
れるホのを多論仮借の集をたをむとれ
りホれ又を一ひうれ物のををむりを六白の
中をなのまを三白なををまのるうちくて出
されさホるのものホしを別ある一既ホ楽簡
集りをあるまりるを組字りて書をれ日
白解をの日本槌るをりまを霰りるを文字を

あゝこめゝるを云 後同じ此癖棄るゝ又冬の日
注解するを云て迷うなと書るゝ罪を犯す
歴秋の字を注釈あるべきを古書の字を私
に書改るゝ也當元に よる也

・さ水わり ゝゝゆく 水のいるゝ

一書に此服を添るて尉の意有 天地変氷月稲
ゝるゝ ゝゝく 氷のひきに彼き歩れを水のいる
毒ゝを作るゝ毒 又一書に月新のうゝるけ
しきをいるつゝに比喩して李る此余意をと
けゝる服るゝといふて非るゝ 魚考准南子曰
日月天使也積陰之寒気 又者爲氷水気之精者爲
月云 さゝ先注のめし

・歯 ゝの紫を初狩人の矢に負て

一書に是又事 移りるゝて時の場ゝの事に大に

変化して云 考 親想此 ゝを さゝゝと放下し
て狩人とを附るゝ市人の初商を 行に
意りて猟師の初狩を きとゝきて歯の紫
此紫胡服に ゝ ゝけて一とをの門出を 行に
姿 歯 ゝ ゝ ゝと云

・北の御門をたしあけの事

一書に変に ゝ御所に初春の音とを附ゝ
例を ゝ脇赤此奏るゝの数ゝ北を 極注

ゝて卑賤の者の通用す きゝ門ゝ
ゝ ゝ 豆曰前 ゝ此狩人を猟師とを見 也
正して武皮公事の狩を勤めに出ゝと見也
してさて ゝを御門をたし 物事此書に附
ゝるゝ二句の間に貢する意味さらに
ゝ北の御門を通用の出入口ゝ南門を

紫震殿の前まで侍従式部らて是用の所此
夕宛て禁裏御所と目を付るなり
馬糞 一書に門前の糞を掃除の姿なり地紙形
に竹木を植て門前のすみ
むさうなりと云
菜湯 去年むし迦の蒲公英
一書に掃除すると菜湯去年むし迦の蒲公英すきを
忌出して菜湯去年むし迦の蒲公英すきを
不浄にて菜湯去年むし迦の蒲公英すきを
むしなくまのきらひ去年むし迦の蒲公英すきを
蒲公英と宣めるは
蒲公英と書て此字蒲公英と云人の
蒲公英と書て此字蒲公英と云人の
う名をめて雲をしるまはその人の名をもて侍すること

らうそをけふのむ姫うしたまて
燈篭 そさいけるさけくふ歌
はけ萩の角力ちうを撰て遣
一書に菜湯所にうしたく姫のものむとあまこて
利休の姫の侍るまあむらくふけ三義
あり労気ちまそいさそ音良強さまそ男
ようう又藤丈是ハ文藤を四といふ藤
藤丈むこの 愚考藤丈を手けふけ多歌
るるものよむ姫るく労気るり 一書に前の
の菜人儒者の姫をくを遊遊
すう侍を侍うらうふけそうはくくよハし
と雑綺ある地なといふまるるらうそ労多り
その心を労すう美るれて家をまのよみ上く
なるみしかるう一浦氏まうふけ成るい

しとなりおきてれどもすりのふとりゐるあるものあるし
深くを傳の字なりつらしきみ深いめの義なるべし文
源氏に四石の入たのつらし深きをましくしたりそは筆
すべきこ造とせずる義を一理あるの苦非をなしむ
にまり陪よ一しし附の意きをものよみまに深く形の芳
まつし娘をも多くきあて世辺のたしきみえまくと
誘連て深みなるなすに出しさなるなり　愚考
此注志る古よよまてらしく言無して深きよ介辰へ
引入しらのれ癖ありて文花をのまつるまであらるあきれ
此らそのまなけるて著しきふなり景氣なり一つのもれ
よ紅娘をきよんひ深まみて世辺み遺造とと見えぬる
そや物よみむ娘ものくぬふ娘世辺一出さらる
よその西外きとらこふとうしこ下一の頁ち文傳の
字義をあくらし作階（カエツリ）の字こ傳ハ下より上を

のし深く之作階を上より下を一つしとてあるとそと
るなりもれよむ娘をといまさ十一の十二三般の一しそまどの
にさ深くのハしく叙の弟をきらく作ものよ深み居るさ
まなるなり世辺へ出る娘のまれたよむやら書ゆら
ま一の志ましるものとの芝て位み深くといへ義を合点
一のまなる一し　一書まきてよれ男ふわるそうなく女の
いはまさまそうこのそむとまおちひ定めぬちまるへしよ代
まのそく録来の數まて男もい女れひへ燈籠をを挑しと
なるなり良林良材よ見け丈和のこの深らてるその侍
まぬらむこの　一書よららるけしといよちのもの花まよ
さるなをを燈籠の擅掾よるなくもにてみそこの男れまと
一人あわたなくる伴まて燈籠一つなまでて男の
りきよりまそのこにしま燈を點をまをいすと云ヽ
志の注志いはまし先注をなやなるむと

さもあらしまいの世すまうらうらしてそまき　一書に
情をうるといふまうの西海と萩の上に見えていつ
まさこのよハきものうるのまと西海の腸をゆ
萩のたいそまぬるやや後落遣に林をまくく
に花ゆをいそさめるみ船一ゆ迎に乗
まとすまふをみ船一ゆ迎にうるといふまう
うめむ又一書に情に腸くらうるといふまう
そのまうの船をく思ひ腸をゆ腸をまふとす
まひの腸負ふゆせて曲芸をそされうう西海
萩のそうけうきくさをそ見一ゆ腸をそ焼
船のはそんすてはゆと萩とのあよしとう
うう思腸をそのすうふ踊子の姿をゆうるれまう
もめうのまるうるうるうるう見を腸をまれるかるる一
愚考家まてそ萬丈をかうるひうる姫と見

えうるえ大和物語に曰昔津の国に狩をしてすむ女の
子芝に立ち慕の男二人ありの男とまれ新こうちち
さうるさしれあつきこ幸又物をれこち狩るて
ふいうるまてさうふゃまうれとう狩しゆふい
ゆまをそまと宮うねて手月をれうれて狩
見を見ねて生田川の西に浮て行る水をを対させて
あてうむ男ふまの子一しと狩うをうふ一人
を所を射ひうそ一その狩を詠して川まうりて死ま二人れ男
ゆいて川ふ赤入一人を見をとう一人を
ううて三人とまふ
所の別當詠歌して
てむ者ふまうまひううふの山を鉄とまふの
使ふ者め一しこの姫の一ゆくそ狩のさまこ

煙霧をもて二人の男の供奉の勝負れ
歌を角力とりの題より應することのめりて
連歌の式目より曰物のうち數故事古歌面をす
べて二句に分ひろ事なくとく歌の二句
を句のしの次の一句をうけてうるはしく
此歌なるよれいてそ今日とりさまを一
章三句の難なるむとおりよ族を句の一十いまをそ
古法をもて今をその沙法をもてその史いるむとして
上後嵯峨院の時時前の句れ七文字よりのとやら
してあやよ恋しきといふ帝ものくそふ
の日のけを今をもとなるとなるこの難句をて
附に法師の句れ問掛し遠乱よ及ん帝曰まの句
遠ものふ一きのより勅撰あるしよ氏部郷入をの
をそまを梅尼をうきまれしやをうるよ氏わ

何象さうるやはをきとやをれるを融覚の云
上を附は一となるをきうるを侍をて附をうる
をうるやを歌む二村の山を附をうをれを
感感頻をうる滿元感歌す是を本歌宜渡三句
をうるとを本歌を後撰集よ法実をれを
をなやよ恋しくなるとのそ二村山をよをるを
りうきと故よ八雲御抄よ曰一首れ歌をさ三句よ割
て附をうる例のなをそのを語三句を面のうを
とををををををれ附よをうるむ
を歌覧をををよ角力をを撰ををとして
をを歌をの連歌をして付をゆるを前二句をそハ
歌原血脈の附をを宣ををををしよその附ふををのの
歌を附ををきをいよそのを附ふををををむ
とををををうを歌のををを山の連句を

れりさてして云うきをくハ附しなり志りらきこを
江列甲賀郡こらゝ山れ法くきこと　　筆写日信ゝ
地竜こゝつの白球ゝ翁の感しまい物の云をり
よりこうくゝを白仏りゝをりやと問ゝ社国云れとき
かうこれ法よりれのひよもしとこ義弾ゝ機姫
よくいしゝる心のけゝりこと慶祝ゝこゝり此弾を
津国ちなゝしゝ姫をくゝりうの男をひて絶
死ゝ及ひゝ古ゝをとゝりゝ白資をれこきこゝ
この平氏の武士仏ゝしの姫の幽霊蜘蛛精
を撃ハ並ひ法の資を弾古秋の古ゝゝ
むすひ合をて一ゝれゝゝ尊れ
をゝゝきゝ実ゝ翁のかめゝひしゝゝ山ハ遠
法弾蜘の白ゝ古れゝ撃ゝて白れ云ゝ云ゝの
帝の巳十二のゝのゝゝゝひの角力より反出し

きゝゝを巻白れ古ゝゝふ合体して附ゝゝ白
云ゝきハ附ゝゝゝ古ゝひゝゝゝ白
れ表ゝゝゝゝ古ゝ二つ利休ゝ姫ゝゝ巳
ツの古ゝゝゝゝの三ゝれうゝゝふゝ心を
ゝゝゝゝゝゝきゝ実ゝ元形ゝゝを法ゝゝ
ゝ

蕎麦さく書し　滋賀、樂の坊
　　藤原して

・彩月夜双六歩れ　聖武帝行基ゝ勅進を
魚考紫魚樂の城　しめゝゝ東大寺の大仏
して大仏をはゝゝし　ゝ城ゝゝゝ白
ゝ月光を移しゝゝゝ　ゝ月夜ゝ
夜ゝゝゝゝ和歌云ゝ　ゝ芸ゝ
すゝゝゝゝきゝ人ゝ　ゝゝゝ文ゝゝ
ゝ云く　愚考子俊の流いゝ　百樂寺一統

後京京辻子宮時 略して云 伝保川より
いゆきいたりて我身くるの衣の上に 秋月夜
云 何そ我翁入来恩なるむや
・其のよるれ業として離を法ぞ法
・今帰の君より来るむと云
一書に離を法ぞ世を思人を是必やこ
とのきれくに形ぞ一しとして今盛の君より
是業として是法き越と侍ると云 一書に
此の二を法やとるきと人の意として面白しと
いふめりそ是来るき事ものとあるといて
意君といて意と心得るなさまし
・まのきまて波の水に流ゆき
一書に来のれるのれを波のなとの是
なく悲しるるり

愚考 離を法ぞ
のはすとい来と 執年とう
といひ今幽より来るて越すといひ只人なる侍
なるに法るみを法ぞて大伴皇子の侍とまう
十す続に曰大伴皇子事あるて離波の津に
出ひまるて中略 その波と云波といふすの吹入てのの
浦さとしく荒れ供れ人しまよりとり来
なく成るひしく云て新る云言湖を津波なる又
湖波 十す続に曰ゆ法るて略す命婦を官女
れ内五位以上を帯を内命婦といふと云て
・佛吟 魚 解き
一書に讃岐国 何の浦と中らに鮫の大
魚あるりるに恵心僧都の仏の像
て腹中より元出しるるのあること
一書に讃列志度の浦 長田の仏平安空大

のすめまして一心念佛に行ぜんとすり或時
志度の浦津波よりて法の上に寄る鍔の
脇よりあり心に此仏の弥陀佛を拝まると云
るものなりかくしてきるものなり

縣の花見次郎と作られて
一書に花見次郎といふて日向国の住人の次郎
とこれいふる者なるべしこの近国の住人
法をもかくの者なるべしして名をもつ
まるものなりその後名をいたして花見次郎
と仇名をつけ給ふとそ因幡の吉いとりの
事なり　一書に次の畠六郎の仇名

の地方多くなるるなりて別に名を綱
景嶽や矢刻の橋のもきぶ
在原に松を植て送りぬ

一書に平角のこの刀長さ短かきて
も一定に一寸なりもれうるそ数の武
ともそ差別ある一書に長さ
八枝素第一の名橋
の里そ日本武尊東征の時矢を捨て
よりして所の名に呼事なり　愚考平
角に長き短角に長き武器一ケ所そ
とそ和心の迷ひなり景嶽やそ名所のやし
ゆ一に長きとも為ること又日数の長ぶ
そ心別なるゆ一に長きぶ
のなるそ決してなくかなるぶと因幡
に長角と揚る長し近代の偽書
なるそ誼を取上もそ出もりむこの事なり
一ツ事に本末すのの族に長きあらそ笑止なるこの

名所、
名は
やはり
不義と
なり

也はうりそめの小筆を費しは同じ面の見渡しをとさく法としてみ字を改るは博て況や両頭はいそをやなまは

詩商人年を人爽ふ酒價弐其角

冬ゝ湖日蕾て駕る鯉翁

らの数句と服を句ひと揚句は

詩商人花を貪ふ酒價この那其角

春湖日蕾て駕興吟翁

ちまちを首尾連環の韻として別の韻句を

すとめるは一日意の格式なり形五巻一目は

揚句は柔ドは壽しし一書は矢利の里

産屋の意義は大きなる松なて世はなし往

来の旅人求めて見物しなこの享保年中の

焼失はるくなりしとさきはその松は特に

詩歌連俳の風雅をもいひれるとなるて

特しなを柴苅長はのひつるむ

晩日をさく力賣年

一書は老松の壽はよせて歌はみそをを不

圖吾ふのをれりは出るさかるは若の

ふしれるは余義なる捨てしはは今を

宮て成出して柴苅はの業はやあるむとこ

いはこのをそをふあるをはをはとして

歌の意はは出はは又小所はのうは

我をこを都はなりと塩この方のをきれう

らの松を意をきは此歌を添て小所を捨てと

あり吉のをは松の一字はの解は使わなり次

のをを浪人の貴は治なて重代の刀を賣

て年の用意ををむとなり

雪は狂吳の國の名をめつらし元
一書に一説して名利を捨て形を忘て刀を賣て世を
風流の道人と遊て心より古人の詩をもとむ
もとめ出て玉恵宗は詩に玉重吳天雪沓軽
楚地花　一書に東坡の作なるの併すしてゆきの
あしたの賓客と指しつる吳國の詩狂人雪の
無に来りて訪に人を秘蓋の刀を酒に代て餐
應す信友の交わり待に黄金不多交不深
とはいまこの朋友小信なき人の浮情をも
誠めつる丁吳國の笠とる麗笠朝鮮笠
東坡笠の類なり一
名人の詩をれりひ出るとを非るり向に附て
風狂人は来まるこ後の注の賓客を又非るり
朋友に信なきとして秘蓋の刀を酒に代ふも

お遠なる一し彼刀を賣て年用意するおりこの
東坡笠なる心得りて風狂人の来るをめつらしく
よろこびてもてなすとなりこの云友を求より来
ふ又名のしるしやの語に待合して一説風流
に玉はるり此刀賣年は年とりに字をいて
えて言ふ妄言をハいに
樓に言る尾　この　斤袖をとく
あるこ人と指を指に呑かさむ
一書に彼雪見は狂人に言る尾の斤袖を
切て樓巻に為るとなる狂人に無あく大しむと
全盛との仇ならに一るり次の名を則　揚屋の
侍にて賓に劉伯倫の詩の意なるとを重
ゝり劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死便埋我

芥子は一重にして花の
無味堂目色時に懲りて稼時に悲しして
一休禅師のいまだ成道せざる時絶書に
よりて芥子の一字むを得て本来の面目なり
立すること一目瞭然よりこれとなりそなりの伊
勢物語

三日月の東をくくく蓬の声

秋湖のすうに琴をつまもれ

一書に一重の芥子に稼の黒なる黄昏時分
三日月に蓬の宿なるをよりを背次の名西
山に三日月をなるのめ東に晩蓬を少て
湖上の泛舟を惜みて琴弾すさまじ
なむ　一書に芥子の一重に入相なる法行を
常の心なるむ次のなる三井寺くゆなりて

秋夜湖水に月のうみしの徐来水波不
興飄々乎め遺世とそるるに赤壁の松
なるに松のひ半ばうきてあるひのあるひる　琴
やるるるむとしてきりに月重て忽借をして
その琴をのらきりそやてひくくとすべき所
なるまとに千眼一統の場をもはるるまして一
端なる興に楽しして借れとも借なて来る
呼なてや興尽れて伯ひてその伯とすという
例のものぬこ向上の自性ありて尋ねの人
の松のひとりなる所なる下　思考一名の少
やう甚お遂きり三月も蓬の声に西にて東
の方なくらしとしてのなるる次のなる三井寺
と宮て湖上の琴を少とりのなるり白虎通
に日琴在南方鐘在西方琴とすとなく変

まし同一義を弾ずるより近却の意
よりいへるいとなるの形一源氏松風の巻にみえたり
のひきてこのきさるしるしの人又ちらの事をこのうつ
ひ引ゝしてその形今のさくちゝしの人とさく狭衣に
日琵琶をとりよせて姫君に奉りて二返り
ばかり弾ずるのよいとなるべきを高しなげ
唱歌をうたはせられてこのきさうしし同しいるの
ようるるてけうたるる又論説日子与人歌頭後必使
返之而後和之

・亮ふるをゆるしてたせを放さう
・声よき念佛藪を奉さつる
一書に巻自琴をしくて借されとる弾ずてうす
といふをきゝ不堕てこのたせを弱きをつわ
れとも的得て是をはや食心をなくて

よ弾ずるより助け得させ
まして意心不安の又識を見ちらるる一次ハ
前自をを弱つといふより爰心のうさちを見
ちゝ略　爲秀白虎通に曰琴禁也禁示
止於邪以正人心也又風俗通に曰琴之爲言禁
也雅之聲動感正也言君子守正以自禁也夫以
書に曰琴動感天地感鬼神その用しちう
奉をいく度もし引ゝすをかのゝに服より
少清ちるに後日的ゝ引て今やうつらむと
するに湖上の曲声に和とろき奉れ魚をの
ちらく湖中一歩のるもるるり芦にて琴れ
徳をもそしうに志ちる一次の自をを又るに
ゆへにそのたせを放ちるをといふに藪越の

為仏を事業としてをめて後世をたすけとす
教生をしるを基とやまりとしてをこころよりてて
為ちやうと又為仏の徳をあらはしるるを琴
と為仏としまして中のたせ詩れ心を改悔をしむ
応琴をを聴く為仏ををきをの世へよ為自字へ
て後自一奪へをるものと為をれ日三四の要要を
いとまを　為　魂　を我を　みるをしく
一書を西坊上人ねををくをを花れををてをる
死ををむをのきをを死れ是月の古三をと色
古の死れ意をて祖翁をその日をねをふをの
ををむきをり　為考揚自をその死をねを
ををををしををまを為の自この全体西行れ死をる
この世へををを翁の引色みて作をを世を

山家集をあくをを心ををををを世方はをを
をををむれをて方ををの一き此死をよく味
ををを一名人れを原をををの是れ日とはけ
為をを見る人の自をををををを見世感歎
ををあをあり但一首をを二首をを御
世のをををををを所をを八はを迷をを

ををを波津を所火燒家ををけをれと
一書を万葉集人丸れ死雑波人世火燒乱をを
けをれと已の妻ををとをめはををき
炭賣のれのを妻をを是をめ
一書を汝一のをきをひをを炭変れき
妻ををいをををををををあをををををを
ををむとををひをををを書ををを

コノうてには
エケセテネヘ
メレの外には
はしよせと
ふ

とあり此てをはりをつめやハらかなるとうて法師りの古今集よりとる此夜の
事をいひやり梅花いろ〳〵やそうれをとなとみて
ろくさの歌よこのうるややそうれをとなとみて
て法師をうるやうりやハこのハを不よるてまえるり
中略炭賣れ書を思へ　思考此注去を考へ
ろくなのるりとき
よ意沈思く自己のうらみて世俗の
寺をうりて初心をのよハすの罪基しまをのて
ろとしをうをエケセテネヘメレの外ををらるり
さのりをさいをめれてうをうてやハの文字ハいを
まのある又いろさをまるねをまるねのてふをよ
て身やハこのうをを別所の意りうさまらのてよ
をを学人のるを不りをハくとをいをれあるの

意をを人をあるをあ〳〵をさし〳〵のをまて
れ歌りを此りを炭賣の古歌さの意ハをり
しを此すをいのうけるかるまりをのを
ほりの思きをなのをりの
人の粧ひを　鏡　とく　寒く
一書よ書よ鏡を負ハきて表を今新し実を
炭賣ハ鏡磨の對りて炭うりのようこまをう
よ鏡をきけ清きを侍るりをりとを
花蘇　馬　骨　の　書　小咲　ふり
一書よ初の五文字花蘇をのあを
をりうよ在て支をうを花と思しる骨
のをと曲ををうを支をうけるを百りの中よ置を
平りよりを一すれを文字ハの第三し
りよ一し　下略　為考いをよ弁ををるをを字

発句にはなれて又同意に芦葉を因にして一の句
て里暮し　宗因　春の山は松より暮てゆきき
絶し　專順　古の里の芋植猫噛ふ　翁
ぐなへ是第三なる事にあらず人々是等の事を
議に第三の句なり一つは如く修する時は第
三に至りの論なしと云て　一書に発句は大事
縦令の第三なりてはそれ入るゝ立文字に變ずべし
又體を見て其中にも句の様にして其は定めて付し然
よりてはそれに入るべきよし初めよりいふべく
七字は格あると心得て句作すべしと云て
並び表の編一向にすゝむるなり第三に定りける
並十句の三つは格の体句第三の意味と
いかなるに付ては其句に向ふべし大山枝形
とらぬ法にして作り付て発句の論に定まる

なきなり仮令十三条の法にして句作りされハ
とて第三に離れたる句を見て是をいかに
第後を以て却て付まとめるは付まにて其の様く
なりゆく猶前むと筆をとりてむその師しに
向ひてあまりにむかひて可なるむ何ゆへ不て発句をも
て第三の本意とするにいふ事を得て余念といて
安く得らるへし近からて発句にして第三に出でら
ぬ能善をとりて心得つき事なり
鶴見えて　窓は　月のすゝみし
一書に花蘇を窓先の生垣とおほえ移し
高き野の巣とい一畳よし花侍を仙境と
もおもひよそて静なるとそて作りつゝむ
幽に林和靖の梅を衣の袖に移し
と云て　発句いふに静かに梅をそへて　林和靖

の俤やふかあり芝よりそ潛よりかありて鶯を
附すなりなり焦氏華集に曰鶴愛陰惡陽
易に曰鳴鶴有陰故に雨鶴好霜故に霜
さまたけ雀に附すなり雀に附すなり雀をそなり花
の咲花の糸物なりけり一ヶ月花をれひとなり

・風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日

一書に秋の日のさひしきに風もしらぬ瓶
の酒さへすくて寂莫の家に花なりと云く
なるなり風なりなるとそなる大に非なり秋の日れさひ
しこと形なり瓶の酒さへなきに剰秋風の法
まさまさ吹すしいるなり必ふのぬるそなる氏
等のぬとなりし又一書に上杉先生の俤
なりとするなり形し非なり

・萩織る笠を市にうすく

一書に萩の花笠とすなり非なり萩と萩
の字し違ひの一書に酒なきとしてなり
萩をて造る笠を市に出して賣らするこ
とを用ふなり

・加茂川や胡森子代系微返し

一書に上加茂の川上に稲荷の祠有此神の
好せ給ふとそのあるなり悲く胡麻を捧
に一本を捧するなり故に此詠なり胡麻
を代系と云なり又をもの社とをいて
一書に家なれ笠を所なりとなれと見なき
系隆なるなり稲荷の社なり加茂の系社なて九月上の
午の日に此系有

・いとそらの舞形のしの代

一書に岩倉を鞠に返き雨なそ加茂を云

倉を造れり　そもそも
よりて必ず年を重ねて
倉を四方よりかこ
ゆる　相武帝王城
埋めるし　此ゆり
・おのれ人の
・うきをそらを
一書に笑えまして
を三年二満として
詩に三年二満過則休
を礼記曰十五面笄二十而嫁故あきて二十三
・花に泣桜の
一書に桜のちる
花を記想しの

男の堂塔として
附る　勇者岩
ゆる則小岩
護のなりて三宝を
笑えまして
上三年
附て三年
成美曰山谷の
勇者二十と云ふ
捨てけり

ます法ます懲ます
よりて
一書に桜の徴を衣の
徴を衣の
愚考前句状に
陽と花とする
と時に拍子に
ゆき全心に
桜に懲る妄想
泣く虚に
をなりの心と
ゆるしを誠に
に絶て花の
海茶後の

懲ます
よりて
花を
衣の
花を求め
て以心伝心大切
探し得に花に
彼納を
て見まく
花を
懲る
泣く
次の後去
水を進め
水宵心の
感歎す
一日は
必

懲の字は書換に究まり
借ものいろは　歎冬をのむ
一書に花の歎臭より　無言禅師なるをと見出
しまる也　借正遍昭いうとし良峯の宗貞と
まをし時女色を好みにつき帝后の姿に
て数多色の衣をまとひて御簾の中に波
しますを宗貞けさうしまゐらす敢て御意なかり
しかば宗貞「山吹の花いろ衣ぬしやたれ問へど
こたへずくちなしにして」とよみたりけるを山吹をと
とあなりしと詠りたまふ虚栗に「山吹や無言禅師の
捨衣」李下衣の硃礦色なるをくちなしとまた「染る
ものゆゑ此なりて山吹といひて葉もそのむかしなりと云て
一書に香も似かよへて山吹は露の底ふかく
なりとし葉ぬも見たまへ香ともに鮮なれ

とりつけし　蒼考　これなりと読みめ釵とよぶ総の
事もや釵也と云るの魏なりと云て此世女をも生し
またこれもその女に出る事なきれ釵なり
成美曰西京雑記曰元后在家嘗有白燕銜白
石大如指墜后績筐中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合之遂還合乃宝釵又遊仙
窟に白燕飛来白玉釵　一書に白燕を日本に
なすといふるなりと云　玄宗皇帝楊貴妃の釵を鋳
きをするとするりと云て　蒼考　非なり白きの
を稀なりといへども既に景行天皇八年天智
天皇六年清和天皇八年白燕を献るされバ
燕雀の類にて見る事なりとてその世の女と
いふをは倭姫なり和論語に曰世の女の部にいふ
伊勢斎宮神道之大祖也日本神道以天女

倭姫は伊勢外宮神道之大祖也倭姫世記に依て明瞭なり年五百餘歳と云ふ

伊賀國の宮ヶ岡に葬る

為根本則天女とて倭姫なりされば日本神代の祖にして御歳五百余歳にして石隠なり
今れ隠ヶ岡是なり本朝古及の貴女と謂つへし扨委しくは倭姫世記等を見るべし
さうひをとらせ一しさて神宮をせのみ
を野の宮に三年ましまし神あらて既隠りの
日ふ立りて天子自此横を神宮の山嶽に神
加一の山を別まの子みうとして横を串あり髪
美なり伊勢の横田川を倭姫の出横を義し
ます所なりよて横田の神社なり
八十葉を三つ見る壹如ちこと
一書に剣を鑄るとしていより神祠に寄位の法
を見入法國より書寿の人を求て剣白又を
老業なの伊勢なりり又そのよの書れ人を余情

こと書をとるに法を見来形一香しいに法をそ
食数の経あり所越紙納を書くと物書
為等葉を見るそのこと
数しるまに一るうこきて葉をたをたを
のいさうれ執美を新る玉言の物傷れ水を
のまむとするに山吹の新うたうをその滝
のもとしるるり高青丘之沼に胴幣花
樹十一枝今日進共岡見を枇杷なり又玉後
拾遺集に山吹れ美紙波をうの
はうのゆくの井出の玉川まれ紙をて
美の新のうたうをうの水を呑に宮とり新
のうたうを一入とのうし退耕録に白之教之
時鼓岡湯薬待学士者飲麒麟草此を東
城の門を之飲等其例かうし

白燕はまこらなる水を飲まれば

宣旨の　こく　釵を鑄る

一書に白燕を泉山の清澄の池に捕まへ出

く山吹のまゆひより水の清らなる所に出

しゝむ本草云人見白燕主生貴女故燕名

天女次々洞冥記曰漢元鳳元年神

女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳

中猶見此釵宮人謀欲斜之明日視釵匣唯見

白燕升天　一書に燕の一名を天女といふ又白

燕を見る人貴女を生するといふ故事なるべし

なるその貴女よりして釵を鑄まくなる宣旨の

下まうと侍ふ一しるして此宣旨のこと

てはこれ最実のものを出すべきなれ

ども釵とまゆひ釵と虚実なる例のものなれ

ばこれ

一云二百四十茅その茅ごとに八十を三つ重ねるといふ

又上の八の字を拙字のなりといふは非

又八十氏川八宣葺のこの数にて只数の多きこと

なるなり又七十二本まで八十を二つ重ねて八十を

三つ重ねるといふ説なり是まで重ねるを忌とする

等是曰多喜安元法眼のの語に白燕を鑄古に

すべきとあり肥無城中に白燕なり城の一名なる

なる事なるべし是を見るの事白燕を見る事

三度法然上人の説として雑事を集める書に中

に曰大和国竹林の巌上に居して動して神武帝

の玉釵を鑄ふ法国に動しの所に百茅以上の

男子此釵を取るものを石集て是に殺すべ

き玉冠を鑄るの例なり竹林巌を拙て矣

[illegible]
す下畧 此古支筆にて此三句はわれわれ不審
なるべし八十年を三つ見る事と解うする冬の
日もすでに曲がりなり冠 [illegible] 今を百
歳といふ寿めたるしとすべしと世下畧て天地の
気弱くなりて人間の寿命みじかく
なりしの事歟 [illegible] 本とも不ふむ事不及 [illegible]
なる一し此時代まで [illegible] 人出生 [illegible]
うなるなりと云く
一八十年の侍 [illegible] 西王母 [illegible] 女 [illegible]
[illegible] 神武帝の玉釵 [illegible] 奪し
[illegible] 書紙 [illegible] 員ぬ [illegible] 傷 [illegible] 怪く 神武帝 [illegible]
[illegible] 帝 [illegible] 人
[illegible] 七夕 [illegible]

一書に元葉の孝 [illegible] 織女の不孝 [illegible] 遠 [illegible]
[illegible] 織女 [illegible] 天帝の娘河西の牽牛と娶 [illegible] 夫
より織 [illegible] て父母 [illegible] 天帝大 [illegible]
いりのひ中 [illegible] て天れ川を隔て七月七日
一夜の [illegible] 則中を断
神 [illegible] 一書に三百年夫の [illegible] と見て凡人
[illegible] 仙人 [illegible]
と [illegible] 衣 [illegible] 林和靖の [illegible]
その [illegible] 人を [illegible] 天人 [illegible]
一し [illegible] 七夕の書を作人 [illegible] 秋 [illegible]
[illegible] 寓言侍の [illegible] と云く 芝山曰七夕の
書の荒 [illegible] 中 [illegible] 神の [illegible]
夜 [illegible]
神 [illegible] 萬葉媒神 [illegible]

澤の[illegible]に[illegible]中に[illegible]
隣りの[illegible]
・西南に　桂の花　時

一書に云ふ七日の月の一桂の花を月の
[illegible]て花に喩へ[illegible]十五日を盛りとして七夕
[illegible]いふを蓋と[illegible]　[illegible]
三日月を[illegible]蓋といふ[illegible]の本源を記さ
ずして杜撰なり七日の月を神へて月は蓋と
利は[illegible]ふ[illegible]七日は月を一日[illegible]の月[illegible]
十五日を月華なりとは[illegible]蓋と名付[illegible]
・蘭のなりたるト木[illegible]

一書に云ふ新の陶[illegible]菜油菜膏として蓋は曲を
とるなり陳義器に曰菜草生澤畔婦人
和油澤頭故曰菜沃秋の夜の[illegible]

蘭は
[illegible]は
花[illegible]
[illegible]
女花は
香苦し
花少し

[illegible]けて家業を[illegible]中は人の油[illegible]
・綫の家に賢明なる女[illegible]て[illegible]
[illegible]考琴操に曰孔子蘭の独秀[illegible]を見て歎して
曰夫蘭を王者の香草の[illegible]て琴を鼓す此曲猗
蘭操と号す淮南子に曰蘭を男[illegible]花
[illegible]香[illegible]女[illegible]を植[illegible]
花を[illegible]香芳しといふ[illegible]
[illegible]女を綫家に[illegible]
[illegible]の人にして[illegible]女は[illegible]
江口の君の情[illegible]
江口の家に一夜[illegible]
[illegible]

・[illegible]中に[illegible]子[illegible]
一書に疱瘡を麻疹の[illegible]正月に

て祝ふるゝ事なり栗洗ふ事なり豆殺ひて
一入ずつ入れ

鞦　向　弁　慶　社　宮

一書に云ふ正月の晦日に陸奥の国に俗を
陸奥の果てなる弁慶の宮に神
樂鞦を打て向ふ一説に米粉
を色を向といふを
おそれくるなり

寅社日の旦を祝ひ起て
一書に弁慶の宮より見入て力士の武仙
を祈り名付を祝ひむとおもひよせ寅の
日の未明に文を清めて素語の如く
一書に台命を蒙りて名付の鈔を打し
と意鈔を起すに私のちなみに及ばされハ

寅年
寅月
寅日
鍛冶職人の
祭日とす

勇者の社に新詣して寅の一字を起の
書なるべし　無名名付の鈔とを作るを名
を打人の別名なり于将莫耶　天国正宗に
この打ちを名の人の名なり私のちなみに
よひうとを名付るやさいの人に台命
をやさむや又寅の一字を起のひきを
たまし法華社襲河なり文天を子まひけ
地を也に人を寅に生る故に子に所寅
に配を天地自然なり寅を猛獣にして
司の部に寅社日を祝に力士の名なる一し
寅年寅月寅社日に力を三寅と号し
て伊豆権現に納わしとなりさそれて　寅ハ
一名社眼なり
雲　このうそ　南　京　の地

一書に南京を南都といふるゆゑ
を力丈の考へ宵ふるまでもなく雲うつ
きを皇都の地ゆゑ崇敬の初なるべ
一書に于將をれるひとを南京の地とを傳
らむ南京へ来呉の地なれとなり　略　通考
呉の于將を非るべし　野剥刀を以刀を良
必定なり

ゐうきして逢ふまでもなく人の像

一書に考良れ時を僅なるまて囲雛ゆひ
て在を太閤秀吉公のは舎弟大和大納言長
の像なるを今を和の農文を為らむ事の考へと
通考に芋より以下割に論す

小の方なるべし　押　やりて
為ら是は義を考むらむ

一書に初陳の為殘をしみ涙をしとゝ送る
宵なるべむ次を其の人は
なるて二百一意なり　通考先一台の琴味大切と
武士なるまて禮の上に考へ殺とをれ武
士なるべ堂上の侍なるゆに考へ殺衣の不
禮ふとハをしものと武士まを禮ハ侍なる公卿ハ
殺衣の体とされて此三百れ侍源平盛衰記平
家物語の侍ふいかを殺侍を為なる
しかを初陳を見送る武士の事と成て
なるべし　押　中の詠に曰村雨を
春ふむすひてを子細を云事ふ
なるて四月ふ七月ふ
といふ四月のうらなる
てを則四月れうらなる

しく論す

田家眺望

霜月や鶴のイ／＼ならひ居て

冬の朝日のあはれなるかな

一書に此眼は余情紙毫にあらはしかたく是の日の数号にさへ備さるものしや善眼をいく度も此句を味ひてすゝみよきこと　一書にさる眼兄弟説にあそめて翁の見出しやけれそれなりしみて此翻案しやまのよ十にあるありと只誰く云流しやまれたるとあり書なるに此句をあらく古代の歌の上れ句にさまに似たる作物れそやれ句の心まてあるものとかいひ作け来るむ　一書に鶴の作くしあるいひ居てといふまてもあらは素をも見ちてるその生脈究て数之それをなんまさあるそわと作のある意味余情いふ一つらひ不可説てゝよして是を解すれ前を却て第二義に落一きなり下略　是等俳諧も是なときれてふれとそあるものゝ眼をそれて数号とするともて古今此歌説あり故に実初に数号の説をと論しあるよりしれのかひなきしく思一し又眼の句余情紙毫にあらはしかたく其の不可説てく是を解さん却て二義に落るれともて愚昧とも又盲しま此上やなるつき眼をあらはの余情とならぬその本体なり若不るまそとけなるまゝ哉一し是余情のなきたるあり鶴を水鳥[。]蠡海集曰水鳥者稟陰鶴鶴亦夜鳴又禽経曰鶴伏鳴則陰仰鳴則晴又酉陽雑俎曰蛙抱聲鶴抱影夜半

[illegible]
勿論なり首うちそらしなどうのつとなり
さ日の歌をうたしまの山のさはの二字まてかなり
余情をいちし海ゝ[illegible]
只物をれなりなりと云流[illegible]
二義ハ為やいなる蓄抱歌と是なり一

櫻橋山家 此 侍を本紫 降

一書ハ二なるハ場のなれ[illegible]
なりなり 第三番の論[illegible]
なりとしてのまを入て学[illegible]
一なれ讀ハ先心を[illegible]
なり侍なる眼[illegible]
ハ凍てなり[illegible]
なきなり本の降[illegible]

見てを死なるなり田家の[illegible]
を見まえ山家の侍なり
いと字ハ眼を注けて味ハ
ひきなるうしの塩ハ[illegible]
一書ハ[illegible]
の吟味なくハ[illegible]
てなるまを[illegible]
なりなりやなりてきいの切 兼考いの歌
まえまをひきなるやなる心先そのひきなる
状を解ハ一きなり第一一なれ魂をハ[illegible]
なるなの類向をなてまて[illegible]
業降ふとい[illegible]
必定なりそのをまむ[illegible]
とを侍なり牛の性と[illegible]

進ずれば故に引張るなり引張らずしてはくせなるまでなのちちちちちちの法なりなり爲言故事曰埒雅曰牛走順風

馬走逆風

・なるほど足は月のうすしと

一書に陳琳檄て曰と見えて書るまるきとして見足を只飾を益計とみえ侍る甲斐の軍場の使まえ侍る

過考大りくよりしなるまるきとなれ詮といふものの見えぬなり引張るなり月の魂まて除中を一るれ掃除なり為ていいや月を定登るまるとといふ心月とりの字を非入用てるはまは美名の月をまて出すまて月の字三るるて為なり必詩きふ方あるべやすはなやすは十七文字なるて涼鈔の意味のなるうるとよかと腸を

ずるねを解きぬなり世説新語補曰奮云臣猶呉牛見月而喘又風俗通まる出るる呉れ北は南の星なりて星甚しき牛の熱るるるを見て又喘くなるとなり故に月を見て更に引張るなり牛をれるなり此月

酌　とり　蓋　蒙　切　いで

幽蒙集に蒙切なりと書て出しくるを云語月の字なり手れらくかるの為なるてるまは必見渡しを忍れその為むなるは為てなり見を蒙切に出と出と一るれ栞懸陽之一書に血ふの酒毒と就向を定め大將に陸方の壹仏の花を生むとする白仏茅しき余情なり此注なるを玄蓋の海なるしを彩

なりてその罪を紀すなり

・秋は花の旅の宿連歌いとこうわよ

御てまて　宮　土　えんゆ歌寺

一書に第百は第三番の歌を席上の活花なり家にて

此上活は小向歌は秋の花見の間の宿連

歌なるべし　一書に此歌は清見寺の活花なり旅

そなりと場を定て三国宗教の不思議と脩なる旅

の一字に力なり　為考清見寺とそなりそやや

いなるまは先任をその中むすむ基土

えゆる寺なるまとてとてよいとれりふてこの歌

河の内は寺なるは清なるえちなりてうきこれの寺

まるまるうなうこいてを決して海なるこ

えうこきさまなるまは後のるまて定なる相別

なりてえなる宮土沙つに御とまてとに力を入宮十

見ゆる寺とを禁なるうの一なの字のうときう

上に京海道をなる見西なこうれまるなるる次の

なるるに論なり

・寒とうして樹の花の　なるる寺

・菜に菜　をそむる雪の香

一書に菜いるに京をなるとなるなるとゆを

ハ云らけるる樹に掛字は余張とあるむる

一書に京桜の立れるの葉天のさるを脩てそ

るに桜菜の自ひをもしるもしる一　為考

いつまを非なる菜の木に京桜のるつに清をて

菜の自ひを春の吹きをとなるるる

・雑遊に　鳥帽子の女五三十

一書に宮まるを義仲の壁物に巴山吹きを

の女中はこそ鳥帽子物衣なるむとを見

[illegible]て花無の侍るもの

・屋　木芍　俗ノ云ふ　[illegible]の義歟

一書ニ近代ノ[illegible]法度方の[illegible]ハ[illegible]を屋[illegible]ノ[illegible]を[illegible]

或ハ木芍藥の京色を[illegible]

紫白ノ[illegible]ノ[illegible]ノ形[illegible]ム雜遲といふより全く

木芍藥ノ[illegible]　一書ニ木芍山の[illegible]京をつく

らせ[illegible]花子ノ[illegible]の本[illegible]一[illegible]意の義歟と

[illegible]ノ書の粧[illegible]ム

・[illegible]　山　橘　よさらもえむ

成美曰古今集業雅注の注山橘を世俗やふ

そうしといひて実赤し髮そきの間山茱萸添

茱萸ノ[illegible]ノ大和本草訓平地木為耶麻多

知波京其形狀亦全今云藪柑子ノ[illegible]

愚考八雲御抄云山タチハ[illegible]牡丹ノ[illegible]又橙之

と云[illegible]牡丹の文[illegible]ノ[illegible]ム花蕚の侍

を[illegible]ムの附ノ[illegible]と橘と牡丹を一[illegible]ノ[illegible]ム

[illegible]て[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

麻刈といふ集ニ寓云ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

對ノ[illegible]ノ[illegible]を迎くとノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

義歟花を附て[illegible]ノ甲斐ノ[illegible]人ノ[illegible]

・[illegible]　[illegible]　[illegible]花を[illegible]拂ひ

・[illegible]　[illegible]　木瓜の　山[illegible]

[illegible]考義歟花を不吉ノ[illegible]ハ流人の体を

附[illegible]て木瓜の山[illegible]ノ[illegible]

本草曰利筋骨去濕[illegible]消水脹治産乱轉筋脚

氣沓痢腰足無力又轉物志曰木瓜味酸善療轉

節如轉節時但呼木瓜名亦上書木瓜之字輙
愈留其義花之義橘の曲をうり公卿の因人に
て和いすりあるの当路の出勇をいさうあるを
とれるひたすけて行かとに妻ひろうあるに山
まて人をまえ氏祥に妻瓜の花の盛に咲て物
をを見給要より出し来らをうに胡蝶
をしまて指に秘義の留を一曲拍子行うう
ちうる花を留とうの亜し歩歩ひろに貸るる亜
し木瓜といひ山間といひうし鬱岡の武士の心
なを陽うをうをうあるに不吉の義花物
是八次に貴を見てとを附きうう
• 玄食の 義をうらうをのめ
一書に貴をえてといふより戦場の貸とえて
その由緒の人のとくるを葬らむと心分そこら
に為合をうるを食の義をを交て貴を色み
て陽うむとする人の貸るる
• 流れ上に尾を引袋を拾ひ捨て
墨考貴を色むといふに義をを一花をひらけ
うく捨の陽うる袋を色むと奪ってるるる
此家に為むりき注釈の書とも時に及ぶ
• 清幸に進む 水れみをする
一書に天濃國養老の滝るむとの清幸と
見出し活袋を献に余勝に為むる 一書に
亜をうるとにより一時して川物の清幸と
陽うる泥のひきに典業氏水毒を解すに
をうるを伝るうる一 歳美日
続日本紀曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不破行宮留連数日因覧當耆郡

多度山美泉自盥手面皮膚如清亦洗痛所無不除愈云　勇秀小角豆　炭圓　芋子　茅子　蓮の実月の華　狐好横　此七品は侍を作りしるしみな殿の作りて紀りを書るゆゑしさまに八ちそ川狩は殿の作りとそえ云なりいろまりなる山吹とは天子なりと行幸と書つきなり

・霧　おく　狐　風　やう　れ　しきさ

勇秀時清を殿を慈野手を雨を悲むに欽明帝十六年壬子を十キツるとき云いし旅しく五雑組曰巣居知風窠居知雨猶を穴に居るものを風を雨を形しに巣を風を雨を穴に居るを穴を源更に及ひ秋天清なりて珍賜として表の一面に並わるしるを清風とつきを

れなるを殿を殿なるを白清水のなりしと為さく
ふを狐を雨を雨のとをうをうをして已に窠に木
の殿に並むるを雨を形しふとを識に巣に一きの
一なるなりとをしの七月に巣なるしされ
注を殿の並をを殿を月紀りに擬して
殿りの殿なるを殿に殿を殿を殿を殿を殿を
を失を殿のの

・豆　腐　殿りて　母社　喪に入

・元　政　の　弟れ　社を　彼　母　一

一書に所庭を喪家に見を殿り古代を殿と
殿り殿てを殿ひ殿に遠の殿に大和国を殿を
を上代の遠殿を殿て殿中篇り殿を殿を殿の喪と云
殿元政と元宣て殿殿りの殿と　復法師八墓母に

春心なる人まして蹇の如く貧ひ方延ふ法
紀りの法敬世より初まる堂流の才物法華一派
の師なり初祖を続隠逸伝ふ者し　成美
日元設を表抵度の嵐士俗称石井平之丞二十六
葉りまして雜賢為伝法孫を摺光寺を筆創す四十
六葉りまして寂

・伏見　木　曦　の　種　花をうつ

遠考法孫の花をうつ伏見木曦の入相のうなる
花やうるまと伝うる法孫櫻とて名木
なり古今哀傷の部　法孫をは遍の櫻しの心
らてうてうてうる遠法孫ふ　花八園嘉帝
の心をとるひるる　雄のよりる歌うり此
歌よりてすみそめ櫻うる名つけしるり
東藩をコロタとよむ一一一名ふ強田と書る

春は男猫が女猫を恋れ
秋は女猫が男猫を恋ふ

ちまき形わ
・いろうるき男猫ひるを捨うひて
春のをすれ雪　くるくるくる
一書に入なのひの伝るる男猫のうつらさるを女
原の多はねるるるるより次れるる猫を
意気を形るるるるる
家るるる女三の宮の貸るるるるるの　遠考
男猫と押出して白伝るる春の猫の本情と
春を男猫う女猫を恋ひ林を女猫う男猫を
・水　手　を　秀　白　れ　重　若　や　う　ふ
・山　菜　花　に　ふ　れ　釜　の　木　う　し
愚考此二白則冬れ日一部を巻納める自
ひるして首尾連環の格なり巻氏の狂句の
二字に対する秀白れ二字なりまを八狂句

の二字をも大切の字眼とし結は曰揚句は
はじめて物を起さんの揚句なるべしとて
を出するをも二句一意なるべしとて巻頭の
し眼の山茶花を今日の格句の格を出でて
の連環なるゆへ結句の格を出でて
めて自立をなすとも此句なり近年此書は
揚句はじめて意句を出し或句なるべしとて
句をもなすを出するをも結の旋句なる一一一折まで
一巻一句をもよく更ふゆへ揚句をも今ふ
例なるべき一格なるべし結句弁は古歌を潜とし
いなるべき歌格なるべし句なるべし

遍照

いかなれとて雅面うしをうる霰

内侍者は
男にして利発
なり
宰公去は
俗刀にして
黒頭なり
序と牛とも
なし

一書は牛の祝きりのは霰の烈しきを歌
白ともり電者砲也中物如砲也下略　恵考
夫木集は荊小因の略の上をは霰玉を
てるをとうはとそ之行助此古歌元を
いつしをを玉をもてをを因世の霰をを歌
といひ連歌といひは只一句のはりをみのみ
挑花して殺伐は義一しをまを我祖義の
義ゆへてこの句仁情の境は恵入あひけまは
蕉風の妙とをを一統をり古人の因をを
すのを勇ましてひたすらををををのは力
はをくして無句をとを牛のはをきりの
むをいの形をむと牛のはをきりのはをく
はをを牛とをををを牛なをををを
楊大は　桔京れ松

一書に牛追の画なりといへり今津なとにて瀧
油なしを飽迄一附出すに牛十なと法く連
に追ひ行呪ひして牛の背きてねりまはる所を
治の夜とす牛を並へて頁なりし卧し牛追
後れ篠家に其芒なとして蓋する作に枯朶を
と枯ひあつめて焼法く酒を壹の后すらりと
め為て休む所にして榾の便なりし炙りて呑こし
牛の部の如く陸て附ぬをきらちし歩よりし壮年
引脚の法まて一つの飲する所しまりて見経ると云
一説に曰榾を火燵の如くに為つらひ旋りの賤
於出の為の並を榾火として燃なりと云て　素堂曰
酒をあたゝめて冬夜をふせくをもつはらとする
ものか俗此わえ夫をさして榾火といひ習はし
て榾火焼背に榾火よりれたりしは此榾出し

人足の为の詞なり杉の根なとにありて体よみき
のなりと云へり此の榾火にして松の根を焦すとなり
夏に焼焦しける所といへる大体此体ホ格ていは
法ま書きるなり
　木織荊　下暗に鬘を兼もむして
一書に木織荊本大体のなして木織荊をみ出し
法あるなり葉笄鬘を油に貯ひ結ひて一和末
ねるのかに来てくらやりれ単てむとも膠併
あらむ　一書に榾火といひえを庭燎ともいふ火
焼なとの神なりと見て神いさめの能と謂さ
天あなり　惣為り木織荊を杖とすまてもあり
為神なりとなりし自れ表もあなきし神なり
の御法といふなや丹なり先注のごとく木織
なりれ出てるなり

・接笠は宮をやどす　秋霧

一書に山路の体にて用明天皇いまし〳〵皇子に
てましましける時彼玉代張を意ひて菊に
しるし供奉り　一書に宮をれに籠ひ給ひて
供奉の人〳〵拾ひ集めてうたく供奉る
一し

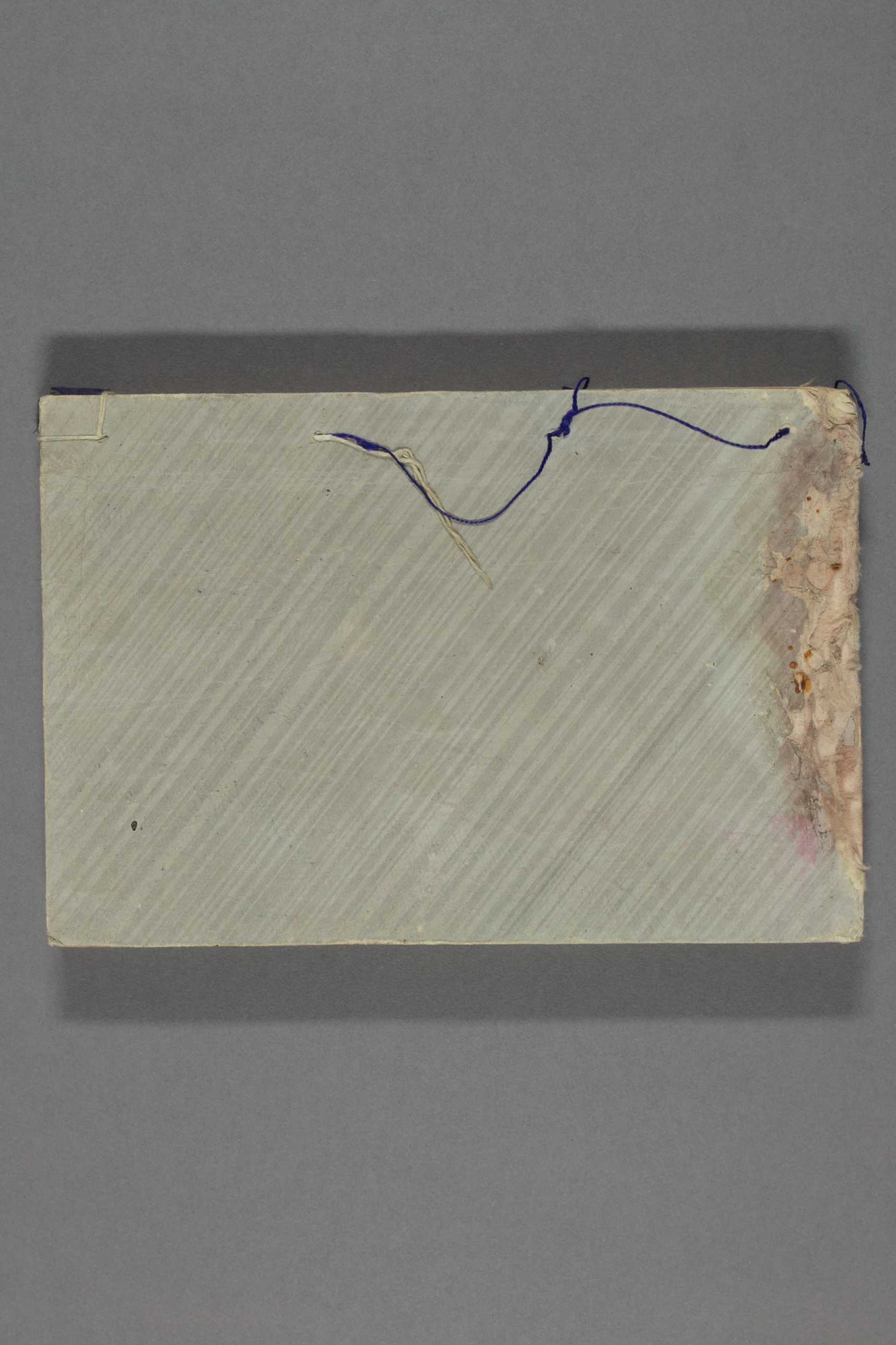
・紙に　拾　の字を　月を海
ひしりに拾　をすす岐阜山
一書に大坂宮をるの漁泊に紙に
拾貫を取と形を取次を燒拾の業を宮て
たに拾をすう右に波阜山を見る賦歌　一書に
表をりれ附を名石流義を出すを等蕉つの
を奉る一し

附て云冬の日を許六曰次韻の風調あるてれか
よるの人れ解すつきりの一句の人と書置しるり
さるを種しの注釈出来りて却て俳諧を害に
至る而をおりる人故に雜陳をさ抜きに及ぶ世上の
れをを孫に和しを古集の解しちひを
今れたいの上に及れ儀をるし見れるに
をを意をいふをして言葉めむとする筆鋒こう
ををを人きひしきをを人をるるるしをを
こう形うう私の宿意にあるをを意に書に見ゆ
るるに一し

落注

・立形　堂　れ　ち　け　六五

夏秀蔵白縣の花見次序を百姓の大氣と見
て稀肥等れ附るる見原氏本曾源の記曰美濃国

立形堂とは
花見花の
ことぶり

加納より西の方平田まで野原形ゆへ馬糞
飼ふ人ハ草形ゆへ田畑よりまむけ花とりて
植て稀とす又ハ茅取て田肥しとす紫草
ハ宝蕊花といふ云て五形草と作り
ハ俳諧の虚実注のまゝ実ハ五形
草とよて荒畠とするハ云語国の癖案
国法をとゝのゝ罪人ハ